



古今稗魁考

二



古今妖魅考二之卷



平篤胤輯考

人 門

山城國 江戸爲史

常陸國 竹來道彦

武藏國 森田昌成

校 同

上、件記されゐる外、形を數の僧名を擧られ、其は姑
く置て、早く寶物集にも、慈惠僧正は行業の高う、
寺小執を止めて、金色の天狗を成ま、と見え。

此僧の行業は高う、事ども、諸書に見え、
九卷、まゝ十訓抄なり。大内、五壇に御修法勤られ、
る小。慈惠は不動尊とあり。寛朝を降三世と現、
少も本

尊小替らぢり。圓融院正しく此事を御覽せられし依
と見え。はく著聞集。十訓抄など。雅縁阿闍梨といふ人。慈
惠僧正。濫行肉食の人ある由云々。慈惠深く憤て。
三寶を祈りしうば。雅縁阿闍梨三塔を走り回て。淨行持
律の人。空言を申し依報とて。狂歩行し依とも有り。
下小舉る雲景が未來記。愛宕山に集ひて。世を亂さむと計
する釋魔の中。此僧も交て在り。其は我慢勝他の宿執を
引きて成れると。祇園を天台末寺と成る一事。故以て
も辨ふべし。

祇園を天台末寺とせ依事。今昔物語集。祇園をも

山階寺に末寺あり。比叡山の末寺と成れり。其故
を。比叡山の末寺。蓮花寺といふ寺あり。然る小祇園の別
當。良筭といふ僧有けり。勢徳ありて世間叶ふ僧あり。
彼蓮花寺に堂の前。紅葉の有る所。十月の比。色に微妙
なれど。良筭を折取り遣りて。蓮花寺に住僧制して云。
く。祇園の別當。徳人は坐せども。何てう天台末寺の内を
依木をば。心り任せて。按内もあらず。折らるべき。極る非
常に事あり。良筭が使かく制せらる。折らる返りて。此
れむ云へむ。良筭大に小嘆て。此云あらは。其木を皆伐り
て來れと云て。從者共を出し立て遣り。然る小蓮花寺に

住僧を定免て良筭が從者を遣せて。此木を伐せむばら
むと悟て。良筭が從者共の來ぎ旅前。住僧みぢうら其
紅葉の木茂根際よ伐臥せてり。然れを良筭が使行て
見る。木を伐てりれ。返て良筭其由云り。彌
喚り。此間横川の慈惠僧正。天台座主とて。殿下の御修
法して。法性寺小在りる。蓮花寺の僧木を伐る。法
性寺小急ぎ參て。此由座主申れば。其時座主肩
を竝ふる人無り。是は。大に喚りて良筭を召し遣り
小。良筭我を山階寺末寺の司あり。何の故ぞ天台座主。我
を心う任せて召べきぞと放言して。參さる。座主彌

喚て。山所司を呼下して。其茂もて祇園の神人ら代人
等。延曆寺小寄る。寄文を書儲りて。其小判を加戸よと
押責りれ。神人ら責られ。判を加へて。其後座主
今小於ては。祇園を天台山の末寺なり。早く別當良筭を追
却さばしと云て追せり。良筭敢て事ともせ。□公正。
平致頼を以ふ兵の郎等とも茂雇ひ寄せて。楯を儲りて。軍
を調へて待りる間。座主此由を聞て彌喚て。西塔の
平南坊といふ處に住る。睿荷と云る僧。極る武藝
第一の者なり。は彼致頼が弟。入禪といふ僧在り。極
る兵あり。此二人を祇園に遣して。良筭を追むる。此

二人彼處カレコに至りて。良算リョサンが儲タケる軍兵イクサに向て云く。汝ら濫マン小箭ヤハナを放ちて悪事を致さば。後の爲アヘに悪うとあむと誘アサり
依ヨる。良算リョサンが雇ヤトへる致頼チレンが郎等ロウトウども。入禪ニゲサリを見て。早ハヤう山の
禪師殿ゼンシの御ミより依ヨるよし有アリきと云て。後の山ヤマに逃去ニゲサリしけ
きは。心ココロに任せて。良算リョサンを追却オウセツしてりて。然シカモに睿荷ズイカを別當ベツトウに
成して執行させりる。其後山階寺サンカイスに大衆オウゴ發りて。公家キョウカに
訴ウタへ申マウにやう。祇園ギエンを往古イニヘより山階寺サンカイスの末寺マツラあり。何ナニでう
恣オシに延曆寺エンリキに押取オシトルらむ。速スミヤカに本の如く。山階寺サンカイスの末寺マツラと
爲ナラふ由を仰オホセ下サゲさ依ヨべしと。度タビに訴ウタ申マウりる程ほどに。御裁許ミサイキョに
遅オソく那ナにられむ。山階寺サンカイスに若ニガキき大衆オウゴ京上キョウジョウして。勸學院コンガクインに著ツキ

けり。公聞食キコシメ驚オドロきて。御沙汰ミサタ有アルべかりり依ヨる。其前ミマヘに彼座カゼ
主慈惠僧正シュイシヤウ失ウシりりて。然サて其沙汰ミサタ明日アス有アルべしと既スデに仰オホセ下サゲ
されりる。山階寺サンカイスの大衆オウゴに皆ミナ勸學院コンガクインに在アルりる。其寺ミテに
中算チュサンは。宗ムネと此事コトを沙汰サタすべき者モノにて有アルける。勸學院コンガクイン近チカ
に小家コイヘに宿ヤドして居イる依ヨる。其夕スヤさり方カタ。前マヘに弟子ドモ共トモに
と數居アタリるを。俄ニガハに中算チュサン只今タビイマ此コに人來ヒトキタらむと云。某達ソノタチは
らく外ソトに出入シュツニュウと云イハる。弟子ドモ共トモに去サリり依ヨる程ほどに。人外ヒトソトに
入來シュツニュウ依ヨるも見えぬ。中算チュサン人と物語モノガタリる音コトの聞キコられむ。
弟子ドモども恠オモシと思おもひる程ほどに。暫許シヤンキョありて。中算チュサン弟子ドモどもを呼ヨビ
りれむ。皆ミナ出來デにける。中算チュサン此コに山の慈惠僧正シュイシヤウに御ミより

おると云^ヒけれむ。弟子ども此を聞て。此を何^{イカ}ふ宣^{ノボ}ふ事ぞ。慈
惠僧正も早^ウう失^ウれし人をばと思^ヒれども。怖^{オソ}くて物も云
ぢて止^ヤりり。然^サて明^アる日此沙汰有^アける。中^{ナカ}算^{サン}風^{カゼ}發^{ハツ}と
と云て。沙汰の庭^{ニハ}う出^デさるまは。山階寺の方^ハ。指^サせる
由^ヨ沙汰を家人無^ナさるるに依^ヨて。其御裁許切^キざりけれむ。大
衆^カども返^カ下^カあとして。遂^スう祇園^{キエン}を。比叡山^{ヒエ}北^キ末寺^{マツ}に成^{ナリ}畢^{ハテ}
る也^ナり。由^ヨねば良^リ算^{サン}が惡^{アク}事^{コト}よと發^{ハツ}る事^{コト}あれども。此を思
ふ。慈惠僧正に強^{ツヨク}く執^{シツ}せる事^{コト}ふこそ有^アぬ。失^ウれりれ
ども。其^タ靈^{タマ}の中^{ナカ}算^{サン}ふを請^{コト}りけれむ。中^{ナカ}算^{サン}は俄^ハに風^{カゼ}發^{ハツ}ととて。
出^イさるる所^{トコロ}あり。中^{ナカ}算^{サン}出^デて沙汰せましかむ。何^{ナニ}うは有^アま

し。然^シれど其^{ソノ}我^ガ知^チて。慈惠僧正の靈^{タマ}も。行^{ユク}て乞^{コト}請^ケとるまあり。
中^{ナカ}算^{サン}は只^{ただ}今^{イマ}ふを非^ヒざるとりめと。弟子共も此を聞^キく人も。皆
知^チかりりと有^アと。

陸奥國の女^メ。法華經を知らず。歎^{ナガ}りぬ。良源の白骨^{ハカネ}に頭^{カサ}の
舌^{シタ}はうと活^{イキ}ぬる。女^メれ家の天井^{テウキョウ}に來^キて。教^{ヲシ}ふるも。我^ガ執^{シツ}に
魔^マ事^{コト}あり。

そは西行法師が撰集抄^{センシュ}。陸奥國平泉郡^{ヘイセン}掬^クといふ里^リ。坂
芝山^{シバヤマ}と云^フ。山^{ヤマ}あり。其^{ソノ}邊^{ヘリ}の河^{カハ}端^{ハタ}。高^{タカ}さ一丈餘^{イツサウヨ}あり。石塔^{イシタツ}を立
とて。針貫^{ハリ}あまはし。草拂^{クサハヒ}あどあり。此^{コノ}は何^{ナニ}れり。事^{コト}ふくと
尋^{タツ}ぬれむ。中^{ナカ}おろ此^{コノ}里^リに小猛將^{コマウサウ}あり。其^{ソノ}女^メある者^{モノ}。法華經^{ハツパキョウ}を讀^{ヨミ}

ありれど。教ふべき者なりしとて。朝夕歎きて過るる。或時
天井の上より聲ありて云やう。汝經を求めて前におけ。我此
小居て教へむと聞ゆ。怪く思ふがら。經を得て前カキに置る
る。天井に上りて。ゆゝしに聲ひて教へけり。八日と云ふみ
れ習終るぬ。此女いふある態ありむと。最怪しく覺えて。天
井を見ゆ。白く少き苔生する首小。舌は活する人。此如く
ある有り。此白骨の教へる處にあそと思驚きて。此を誰ひて
御らむと強う尋ぬると。我をこれ延暦寺に昔の住侶。
慈惠大師の首あり。汝が志を感じて來て教ふ。急死我を
坂芝山に送きと有りれむ。哀に忝カシヤチきあとに覺えて。泣く此

山に納めて。此の如く塔婆あどせるが。此頃までも山中に。
貴妃御經に音ある折も侍り。ゆゑ此女を尼にお立て。此山
中小菴イホリを結びて。思ひまして在し。此二十餘年きたる往
生して。其菴に形カタチ今小に正見よと云ふ。彼人と伴ひて見
る。口三間ある屋の形むり残りありと有り。

此を良源法師のみ知らず。和漢の法師。舌のみ死せ。經
を讀誦し。類タカといと多うれど。一切法に著せるを。法智魔
と謂ふ。ある魔事ある物字や。序に此方コナタに此事の有し。或尚
記さば。古今著聞集に宿執篇に。壹庵といふ僧有り。多年法
花經に歸して修し。寂間。紀伊國穴背山シカセに至りて宿し。る

夜も其人を見^ミて。法花經^{フキョウキョウ}をよむ聲聞えり。一部讀終^{ヨミヲハ}て經の聲止^{ヤミ}ぬ。怪^{オモシ}く思^モて。朝も其程を見る。年序^{トシヘ}經^{キョウ}たる白骨あ^アり。更^モも分散せむ^シ。正體^{テイ}これ續^ツきあ^アり。其髑髏^{ドコロ}の中小舌あり。壹^{イツ}膚髑髏^{ドコロ}小向^{コウ}ひて。其因縁を尋^タぬ。舌答^ゼりて云^ク。我はあ^アれ叡^エ山の僧^{ソウ}。名^ナを^ヲは圓^{エン}善^{ゼン}と云^ハた。修行の間此山^{コノヤマ}に至^{いた}りて。矢^ヤハに。前生^{ゼンシヨウ}の法華經^{フキョウキョウ}六万部讀奉^{ヨミマカ}らむと願^{カガ}ふ起^おして。生分^{ナマセ}を既^{スデ}に終^ハりふ^ハ。計^{ハカ}らばる小生^{コナマ}を隔^ヘち云^クへども。其願^{カガ}を誦^{ソク}滿^{マン}せむ^ハ。猶^{ナホ}誦^{ソク}はるあり。今^{コノイマ}年已^{スデ}に讀終^{ヨミヲハ}りて。正^{マサ}に塋^{トウ}卒^{ソツ}の内院^{ノウイン}に生^{ナマ}むべしと云^クり。壹^{イツ}膚此事^{コノコト}を聞^キて。禮^{レイ}拜^ハして去^サりけ^レ。此^{コノ}の如^カき例^{レイ}多^タし。靈異記^{レイイキ}にも。熊野山^{クマノヤマ}。金峰山^{キンポウヤマ}など。誦^{ソク}經^{キョウ}は

髑髏^{ドコロ}有^{アル}る由^ユ見^ミえり。此等^{コノラ}みか執^{シツ}の深^{フカ}き至^{いた}りありと見^ミゆ。

信^シは靈異記^{レイイキ}。阿部^{アベ}天皇^{テンノウ}の御世^{ミヨ}に。紀伊國^{キイ}牟婁郡^{ムロ}熊野村^{クマノムラ}に。永興^{エイキョウ}禪師^{ゼンシ}といふ僧^{ソウ}有^{アル}り。人^{ヒト}其行^{コノコト}を美^ホめて。都^{ミヤコ}よ^リ南^{ミナミ}ある國^{クニ}の人^{ヒト}故^{コト}り。南菩薩^{ナンボツサツ}と稱^イひき。此^{コノ}が許^{モト}に來^キて仕^シる僧^{ソウ}の。山小入^{コナト}て行^{ユク}せむ^ハ。云^クひて。麻繩^{マヅナ}二十尋^{ニジュン}。水瓶^{スイガメ}一口^{イツク}持^モて別^{ワケ}去^サる。二年^{ニネン}伐^キ過^スて熊野村^{クマノムラ}の人^{ヒト}。熊野河^{クマノカハ}上^ノの山^{ヤマ}に至^{いた}りて。樹^キを伐^キて。船^{フネ}を作り^{ツク}り。聞^キひて法花經^{フキョウキョウ}を讀^{ヨム}音^{オン}あり。月日^{グハツニチ}伐^キ累^{カサ}ぬ。小猶^{コナホ}止^ヤまば。貴^{タカ}く覺^{サト}えて山深^{ヤマフカ}に尋^タぬ。小見^{コミ}え。還^{カヘ}りて。永興^{エイキョウ}并^{ナヒ}に云^ク。井^イ怪^{オモシ}み往^{イキ}て聞^キく。小聲^{コナナ}あり。尋^タ求めて見^ミれば。一^{イツ}の屍骨^{シイボネ}あり。麻繩^{マヅナ}をもて二足^{ニソク}繫^{ツナ}ぎ。巖^{イハ}に懸^カり身^ミを投^ナげ

て死カタシなり。其傍カタシに水瓶あり。此をもて別去リれる僧あり。事を
知り。悲哭カヘして還る。三年後ヘ還て山人告ツケ云く。讀經の音コト今
止ヤまじと。并ナまゝ往て其骨ハネを取らむと將て。髑髏シを見れむ。
三年小至イキタリて其舌腐クサぶ。茫然として生有イキタリり。まゝ吉野金
峰山ミネに一禪師あり。峰ミネを行て行道ユクサキを修ユふ。往前コノミに法花經。金
剛般若經を讀ヨむ音あり。草中オシヒラに排オシ開ヒラき見れむ。一ツの髑髏シあり。
久しく歴ヘて日小曝サシく。其舌爛タゲれむ。生著イキツトて有り。禪師
そキヨキトコロ淨處トリヲサに取收めて。草を以て其上を草覆フキカホひ。共ニに經を讀
て六時シに行道ユクサキに。禪師が法花經を讀むシタガに従シひ。共ニに讀む故
小。其舌を見れむ。舌振動フリカガありと有リ。此永興禪師が事は。今昔

物語集ナも見えナ。そは靈異記を取れるナあり。猶ナホ言
はズ。今昔物語集ナ。春朝持經者ス顯ユ經驗語ヲとある條ナ。今昔
春朝と云ふ持經者ナ有り。日夜ニに法花經を讀誦スミカして。棲スミカを
不定サダメズして所ナに流浪リウラフして。只法華經を讀誦スミカし。心ココロに人ヒトを哀
みて。人の苦クルシむ事コト見ては。我が苦クルシと思ひ。人の喜ヨロコビふ事を見
ては。我が樂タカシと思ふ。然る間アタ。春朝遂ユに行き宿ヤドる棲スミカ无ナくして。
一條に馬出の舎ナに下スりて死シなり。髑髏シも其邊アタリに有リ。
取スツて棄スツる人ナ无ナし。其後その渡ワタリに人夜聞ヨゴトく。毎夜ヨゴトに法華經
を誦ソる音コト有り。其邊ヒトに人等ヒト此を聞て。貴カキリナシむ事无限ナ。然れど
も誰人の誦ソるコトと不知シラズして。怪アヤシと思ふ間ホド。或シ聖人出來て。

此、髑髏を取て。深き山に持行て置り。其後此經を誦むる音絶ぬ。然れど其邊の人。此髑髏□□誦けりと云。事を知小り。春朝上人をば。只人な非ず權者也。とぞ其時の人云けると有るは。甚よく類する事共ありかし。

靈異記。右の事。或記せる末。諒知大乘不思議力。誦經積功。驗德也。贊曰。貴哉受血肉身。常誦法華。得大乘驗。投身曝骨。而髑髏中著舌不爛。是聖不凡矣。と云へども。悉く釋魔に率られし。宿執の爲に處りて。中にも兩足を繋ぎて身投するは。謂ふが如く殊に炳き。大乘に思ふべき驗あるを。是聖不凡と貴記事小云ひ思ふ。佛者の心ちか。異しき物を無り。と。

然るは西行法師が撰集抄にも。慈惠大師のゆき首に。經誦と依事を記せる末。かゝる例にも有難く。かき聞さるる心地して。物を覚えたと書し。此法師も。佛法の事とし云ふ。何ともなりき事にも涙を落す。元より泣類に法師あれ。然も有べ記す。此外の書共にも。かゝる依事をば。いを貴けし記せるを。傍に記事あり。然るに著聞集ふのみ。此類を宿執篇に記して。由りき事小思へる状を依に。見高き撰者あり。と。○序小言はむ。西行を法師の多うる中にも。歌作とある故。物の哀を知り。顔して。撰集抄に記せる事と。もを見せば。おや。物も移き出むとせらる。拙き事を

し泣^{ナキツラ}煩^{ワザ}して記^キし。名聞宿執あどの筋^{スサ}を。い^イを淨^{イサギ}よく失^{ウシ}ひ畢^{ハテ}
ある様^{サマ}子云へま^マども。宿執の心^{ココロ}をいと深^{フカ}くぞ有^アりる。其^{ソノ}を
著聞集^{シヨクブン}の。是も宿執篇^{シヨクシツヘン}子。西行法師出家よ^{サキ}と前^{サキ}を。徳大寺左
大臣^{サダノリ}に家人^{カネ}ふて有^アりり。多年修行の^{タニ}ち都^{ミヤコ}へ歸^{カヘ}りて。年^{トシ}ご
ろの主君^{ヌシ}うてお^オな^ナん睦^{ムツ}しさ^サふ。公衡^{キョウ}に中將^{チュウシャウ}の許^{モト}へ尋^{タツ}ねて
伺^{ウカ}ひ見^ミれた。縹^{ハナダ}の白裡^{シロウラ}に狩衣^{カリギヌ}子。お^オと物^{モノ}の奴袴^{サシズキ}踏^{フミ}く^ミみて。
庭^{ニハ}に櫻^{オウ}を詠^ユめて。高欒^{コウラン}子寄居^{ヨリキ}する状^{サマ}いと優^{ユウ}ふて。徳大寺の
御跡^{ミアト}を。此^{コノ}人^{ヒト}に御^ミり^ミと^ミ思^{オモ}ひて。左右^{サウヨウ}あく櫻^{オウ}の本^ホ子立寄^{タチヨリ}
と^ミれば。中將^{チュウシャウ}い^イう^ウ形^{カタ}る人^{ヒト}ふ^フと尋^{タツ}られ^レる^ルふ。西行^{サイギョウ}と申^{マシ}
者の参^{マシ}て候^{コト}と申^{マシ}られ^レた。年^{トシ}お^オろ見^ミ参^{マシ}た^タか^カと^ミり^ミ候^{コト}を

殊^{コト}に悦^{ヨロコビ}給^{タマフ}ひて。椽^{スサギ}の上^ノに呼^{ヨビ}上^{ノボ}せて。昔^{コト}今^{イマ}に事^{コト}語^{カタリ}られ^レる。日
やうく暮^クふ^フられ^レた。西行^{サイギョウ}は歸^{カヘ}りぬ。其^{ソノ}後^{ノチ}常^{トコ}に参^{マシ}て物^{モノ}語^{カタリ}
あり^アて。か^カゝ旅^{リョ}程^{ジョウ}子。任^{マカ}大臣^{テイジン}有^アべ^ベと聞^{キコ}え^エり^リて。藏^{ソウ}人^{ジン}頭^{トウ}子彼^{カノ}
中將^{チュウシャウ}に成^{ナリ}べき仁^ニ子當^{タウ}り給^{タマフ}ひ^ヒる^ルふ。院^{イン}を中將^{チュウシャウ}成^{ナリ}經^{キョウ}朝^{テウ}臣^{シン}を
成^ナさむと思^{オモ}食^シし。殿^{テン}下^カは大藏^{ダイゾウ}卿^{ケイ}賴^{ライ}宗^{ソウ}朝^{テウ}臣^{シン}被^ヒ推^{スシ}舉^{キョ}何^{ナニ}り^リま
む。兩^{リウ}闕^{ケツ}也^ヤも小^コ叶^{エフ}ふま^マじげ^ゲに聞^{キコ}え^エる^ルを。西行^{サイギョウ}聞^{キコ}て。い^イそ^ソぎ
中將^{チュウシャウ}の許^{モト}子詣^{ヨミ}で其^{ソノ}由^ユを語^{カタリ}りて。人^{ヒト}子越^{コエ}られ給^{タマフ}ひ^ヒあ^アば。定^{サダメ}
て世^セを遁^{ノゲ}れ給^{タマフ}む^ムび^ビら^ラむ形^{カタ}ど申^{マシ}り^リ候^{コト}を。中將^{チュウシャウ}聞^{キコ}て。誠^{マコト}にさ
あ^アそ有^{アル}は^ハり^リま^マども。母^{ハハ}尼^ニ堂^{ドウ}を立^{タテ}べき願^{ガン}有^アて。其^{ソノ}間^マの事^{コト}を申^{マシ}
付^{ツケ}く。出家^{シュツガ}に身^ミ小^コて口^{クチ}入^イせむ事^{コト}。勸^{スベ}化^ケ法師^{ホフシ}に似^ニくらむ形^{カタ}れ

ば。其願とげて後ふ計ふべしと答らむければ西行心おと
として歸りぬ。任大臣のちいで小聞えしが如く。成經朝臣
藏人頭小補せられふりて。其朝西行弟子を中將の許へや
りて。若やとて事ぐらを見せらるる。敢て日來る替る事無
くられむ。又ふみを持て。申候し事をいうふと尋らむら
ふ。見參れと記委く申べしと返事せられりまは。無下の人
にて御りやて。其後を向はぶ成ふりて。世を遁れ身を捨
ふれども。心を昔小かはらぶ。達くし有けるなりと有り。聖
人兒はまれども。五蘊六塵の宿執魔縁を去敢ざるまとは。
是をもて知べし。

ちて上り舉ぐる四大師を更あり。叡山の中興と稱れし人々
ら。右小記より如く。憍慢宿執。名利勝他は魔念深有しうば。其末
派門葉の僧徒は。魔縁を引ざるは。一人も有はじたこと。前小
記せる道昭法師が靈の語。天竺震旦本朝。名を得る貴
僧高僧は。魔道は落る類。勝て計ふはうらぶと言ひ。下
に舉る開發源大夫住吉と名告れる鬼の語。諸宗の宜しき法
師を。皆天狗に成れる故。其數を知らず。大智は僧を大天狗
とあり。小智の僧を小天狗とあり。無智の僧を畜生道に墮
六十餘州は山峰。或は二三十人。或は五十百二百人。天狗の
集らるる處あり。と言へるう思ひ合せて辨ふべし。

その開發源大夫住吉といふ物の語を。第四卷小それ全文
を引て論ふを見るべし。

抑大智れ僧の大釋魔と成て。小智れ僧の小釋魔と成て。人々
誑惑し。世を騷亂せしむる事は。上も下も記し辨ふる如
くある。謂ゆる無智の僧れ。畜生道に墮するは。多く屎糞を
成りて。是を釋子れ因を引き。隨分の幻果を得て。種々の變
相を現し。世をも人々も誑うる物もぞ有る。其をまが驚と
驚とは一類の物なりて。驚ハ驚の大きく猛き物。驚ハ驚れ小き
く怯き物なりて。形も類する故。古くは驚字驚とも云へり。然
協を神世小。天日驚翔矢命といふを。驚を掌給ふ神を聞え。始

て弓を製す。弓削氏の祖ある謂ふより。矢小驚の羽を用
ふる。天照大御神れ。天岩屋小幽居する時。弓六張を竝べ
て琴と成て。其子長白羽命小奏しめ給へる。其時。金色の鷄
高幡の上より居ありと有る。やがて天日驚命の暫く化すると
通ふは。鷄あるべき。鷄とあるは。形の類するを言ふ。此
縁小より。天日驚命をま。天金鷄命とも申せり。

琴彈く上り金色の鷄と化て來れる。おれ鷄尾琴を製れる
事本あり。ま。神武天皇れ。大和國に征入り給ふ時。金色
の鷄。御弓れ彈小止れと有る。天日驚命の化する。あて。驚
ある。よく覺ゆ。乃古史傳に委く考す記をを見へし。

但し此を神の御態あるを。釋魔の鷲此形を現じしは。寶物
集小。東大寺に一番の別當。良辨僧正を。相摸國の人なり。三歲
此と此父母懷き出して愛せるを。金色ある鷲來りて抓去り
ぬ。父母悲むと云へども。空小消えて失せぬ。鷲ハ大和國春日
山ある。木の空小置て是を養ふ。此子日茂。歷年積りて。物の心
付く程小。佛法を修行す。人は金鷲仙人と名付く。

此事今昔物語。古事談。佛法傳通緣起など小見えて。金鐘行
者ともあり。はく元亨釈書小に。釈良辨。姓百濟氏。近州志賀
里人。其母祈觀音像而得。二歲時母桑焉置兒於樹陰。忽大鷲
落捉兒而去。母悲望。赴鷲而往。不歸家。初南京義淵詣春日神

祠。見鷲鳥于野。將小兒也。鷲見人而避。淵收而歸。甫五歲就學。
聞一知十。云くと見え。まゝ大山緣起と云書ふ。良辨者相摸
國鎌倉郡由伊郷人也。俗姓漆部氏。當國良將漆屋太郎大夫
時忠子也。母未之聞也云々。時忠年四十一無胤子。遂就幽冥
禱。是或夜夢有一高僧來告曰。汝所請求我哀之。授一卷。亦曰。
我是靈山釈迦。斯妙典。弥勒菩薩也。時忠夢中嬉懼甚。即披而
閱之。法華經第一卷也。如言告妻。妻曰。今夜妾亦夢。夢狀相同。
無違矣。夫婦感夢。知其有子。既而有身。遂生一男。父母以爲匪
凡人。育之。鍾愛尤切。歷五十日。乳母提携遊觀園中。金色鷲不
意飛來。執其兒入雲矣。云々とあるを以て。金色鷲の佛魔を

る事を知る。行囊抄。此全文を引く。古き書と見え。又。同書。相傳曰。父大住郡三宮大明神是也。母則號易産大明神ともいふ。

仙人さけみ木の空ウツロにて。佛法を修行せしむ。非ず。一堂を建立せむと思へども。私力乏みて叶ふも無き。公家も申す事や思ひに似る。奉公無て。天聴を驚オドロさむと思ひて。南無聖朝安穩といひ。稽首ヌカヅに似聲。聖武天皇の奈良都。御座カシマり。頃ある。隠カクレく聞えけり。まゐる金色に光。春日山より來りて。禁中を照テラすと見る人あり。はる春日山。弥勒光ミロクを放ちて御座カシマと。多くの人を夢に見ゆ。

此を金鷲行者は。弥勒の化現といふ事。普アミテく人不知しめて。世に用いられむとして。行ユクする幻術の夢あり。佛者多くある所ワカに。上引る大山古縁起も。良辨を弥勒と云ふ事あり。

是故に天皇勅使を遣ツタして。仙人を召メて故に問給ふ。仙人願ネガひ有アリ狀を申す。天皇徳小歸して一堂を建立し給ふ。今東大寺是ありと有る。此不思議どもは。凡スベて佛法の異驗にて。金色に鷲やぐて釋魔ありし故に。良辨は木に空ウツロに養ひ。幻通を執りて聲を遠トホ音小響ヒビか。光を放ち夢を見せんと。種タネ々の異驗を現アワはし。天聴を驚オドロく奉れる。是を釋魔の鷲に形を現アワは

せむ。始る。

此事は。巫學談弊。東大寺建立此事を論へる處。委
く辨へられむ。此は大畧を云あり。義楚六帖云。
靈鷲山似鷲鳥。有靈多集。故名靈鷲峰。聳類臺。故云鷲臺山。
いひま。法顯傳云。祇園屈山有大石室。阿難入定。魔化為鷲
鳥來怖阿難。とあるは。由有ける事なり。まゝ名義集三卷
にも。常在靈鷲山の事を云へむ。披き見るに。因云ふ。
抱朴子廣譬篇。小金鷲不競。擊於小鷄。とあり。和名抄云。唐韻
云。鷲。大鷄也。鷄。鷲鳥別名也。山海經注云。鷲。小鷄也。鷄。和名。於
保和之。鷲。古和之。と有れむ。此金鷲も黄金色の鷄を言ふ。

他漢籍に。此熟字未見當らむ。猶考ふべし。

あゝ同書。慈惠僧正。金色天狗と化。と云ふも。金色
の鷲。形を云へ。と聞ゆ。其を雲景。未來記。崇徳天皇の
御靈の御形。金色鷄の形。見成し奉れるを。思ひ合せて
辨ふ。是。鷲を鷄とも見成。一證と云べし。ゆゑ鷄
に正しく。佛菩薩縁有る事を。知れきは。今昔物語集。大和
國平群郡。鷄村。岡本寺といふ寺あり。尼の住する寺あり。
此を聖徳太子の宮ありしを。太子誓願を發して。尼寺と為
給へり。と。靈異記。小見えあり。

其寺小。銅の觀音。像十二體あり。而る小聖武天皇の御世。

彼像六體を盗人小取られぬ尋求むれども得ず其後程を経て其郡北驛の西方に小き池あり夏のあろ其池の邊に牛飼の童部ども在るに池中小き木指出て其木に鷄居り此事靈異記にも載せて鷄を鷄まゝ鷄まゝ鷄まゝ誤れり。さて本草綱目云く鷄似鷹而稍小也其尾如舵極善高翔專捉雞雀其攫物如射と寺嶋良安云く鷄有無益而多有之鳥為人所憎也然俗傳曰愛宕之鷄熊野之鳥以為神使未知其據也といへ良安鷄と鷄を共り惡鳥云へども二鳥共り惡き中にもあつ世の為人に為とある事も有覺るを其を此言はふ儲まゝ鷄と鷄は甚も中

悪く鷄の鷄を責むる事は淡き由有ける事なり。

童部おれを見て礫塊あど拾ひて打たふ鷄去らばあて尚居あて然まは童部投打た事を止めて池の下で鷄を捕へむ也る小鷄忽ち失せて居りる木を卵有り其木をよく見れた金の指うて有り童部怪みて此を取て牽上る小觀音に銅像おれ童部おの陸に牽上りて里人は此事を告ぐ岡本寺の尼等も此事を聞て里人も共り來て見る小岡本寺の觀音おれ塗る金を皆落しり尼ども觀音を圍繞して泣悲み忽ち轡を造て本の岡本寺に渡して安置しり其邊に道俗男女集りて禮拜して錢を鑄る盜の態あらむと云

ひき。此を思ふ。彼池に有る鵝を。實に鵝は非ず。觀音の
鵝と變じて示し給ふる也。と有を見て知べし。此事靈異記に
も載せられむ。見合せて記し給。撰者の評ふ。彼池に有る鵝を。
實の鵝は非ず。觀音に變じて鵝と成まる也。とあるを違へ
ず。然るを觀音と云は。元より有名無實の佛あるが。其靈驗あ
る事は。釋魔の態あるふ。彼池に有る鵝を。此觀音像に憑り
て。其驗を示はる釋魔が。眞の形を現じて。盜人の爲る。池に隱
れれて在る由を示せ給ふて。觀音の靈驗といふは。皆これ類
ある。かく論ふをも。疑をむ人れ爲る言はず。源平盛衰記
に。文覺を渡邊黨に。遠藤左近將監盛光が一男。上西門院の北

面の下臍あり。其母いまづ子あり。夫妻共は家の絶ある事を
歎きて。長谷寺の觀音に詣で。七箇日祈り申されむ。左の袖に
鳶の羽を給ふると夢に見て。懷妊して儲けたる子あり。父を
六十一。母を四十三よりて生れたる一男あり。

觀音は。天狗あると元より名まは。其一羽を別りて。まづ
し子に魂とは爲せるあり。

母は難産して死に。三歳の時父盛光も死去。十八歳少て。系惜
き女に後れて髪をきり。日本一州の高き峰に至らぬ地なく。七
日。二七日。三七日。百日籠り行ひ。十八歳少て出家して。一十三
年の間。山臥修行者の勤苦なり。此文覺を。天狗の法成就此人

ひて。法師をば男ふあし。男をば法師ふあしなとして。現心は
無りなれども。あしに荒行者ふて。度々鍔金顯しする者あ
り。心ふよく。身も健ふあて。立ぬ願もあく。せぬ業もあし。斯
めりれば。發心地。物氣れと云て。請用隙れし。向と向ぬる小空
あき事をれし。餘り小暇あき折は。念珠袈裟を遣して。病者の
目小も見せ。手小も取せぬまを。忽ち驗を顯るん。

觀音は右う云。如く。有名無實の物あれど。そまが靈驗とて
種々のこまあるは。釈魔の觀音とあて有る故あり。然る
を是が父母。その後胤に絶むこまを悲みあむふも。神を祈
るまきよとあふふ。觀音を祈れるは。時世の狀れまばいふ

小ふら孫ど。觀音もし善心のまのあらむふも。其願のおと
く。家を継べき子に授くまき小。天狗を授て出家せしめ。家
に継ぎ絶するは。いふ小天狗に枉まる所為あらまや。

係としかむ。元來天狗根性ある上。慢心強く。高聲多言ふし
て。人をも人とせざりし餘り小。法皇の御所ふあはれて。獄
小入らまふまき。悪口止ま。遠くは三年。近くは三月が中
ろ。思ひあらせ申さむ。三寶護法とて。利生を現し給へ
と。手合せ念珠を操て。院御所を呪詛し奉るる小。獄中れ
者共も。身の毛豎て覺るる。いままふや上西門の女院。指する
御惱まはしまらまして。隠れさせ給より。斯て文覺を。院御

る形の量あらでは。用を成おと能を。かく怯くて苦み居
あそいと墓元りれ。説苑といふ漢籍に。伍員が吳王に云け
ぬ。龍は魚の形ありて。浪に戯れて浮る程。預諸と
云もの。網を引るる懸りて。悲し死目を見て。大海にか
へて龍王に訟へけまは。龍王ことわて云く。何しふ
く魚は姿とは成りぬ。然れども。網をかき。今よ。然
ゆ事をまほじき也と云へる事あり。虚實ハ知らぬと。豐臣
太閤に。曾呂利が鬼神の夢に託して。諫めし言をも思ひ合
せて。人を無下。品を落さほじき物ありと。
而る間。彼天狗比叡山に。行て。短を伺ひて。貴き僧を取むと

思ひて。夜東塔の北谷に在りぬ。高き木に居て伺ふ程。其向
小造懸るる房あり。其房に在る僧。椽に出て小便を。手拭
洗ちむぐ為。水瓶を持て手を洗ひ居る。此天狗木より飛
來て。僧を搔抓みて。遙く比良山に栖る洞に。行て。龍の在る
處に打置け。僧は水瓶を持あぐら。我も非で居る。今を限
と思ふ程。天狗は僧を置いて去ぬ。
此所行を具ふ思ふは。本文に鷄と有れど。鷄の所行
あり。舊く鷲と鷹とを混じ云へる。此ももて悟るべし。
鷄を人な抓み去て。碎食ふ程の事は。あき物にて。鷲こそ
然ること常なるをや。

其時トキ小暗コクラき處トコロ音有コエりて僧ソウ小問トヒケラ云く。汝イニもこそ誰人ナニぞ。何ナニよ
り來コシぞと問ふ。僧答コタヘて云く。我ワレを比叡山ヒイの僧ソウあり。手を洗ソノはむ
為ナリふ。坊ボウの椽ケラより出デりりるを。天狗テウ俄ニガハに抓ツカみ取トルて。將來イデキ起キるを
也。然シカれども水瓶スイビンを持モツながら來キるを。抑ソメかく云ふを。まゝ誰
ぞと云コトふ。答コタヘ云く。我ワレを讃岐サンキ國クニ方能ツキ池イケに住スミむ龍リウあり。堤ツミより這ハ出デ
るを。此コノ天狗テウ空カラより飛トビ來キて。俄ニガハに抓ツカみて此洞コノ小將來コノ來キ
也。狹セくて為セむ方スベあく。一滴イツツツの水ノミも無ナれども。空カラも翔カらぬと云
ふ。僧云く。此持モツる水瓶スイビン。若モシ一滴イツツツの水ノミや殘ノコりむと云へむ。
龍リウ此コノを聞キて喜ヨロコビて云く。我ワレ此處コノ小して日來ヒゴロヘ經ヘて。既スデに命終イニチヲヘあむ
と為ナリる。幸イハレ小來會キし給タマフひて。互タガヒに命イデを助タスくる事コトを得ウルべし。若

一滴イツツツの水ノミあらば。汝イニも本ホノの栖スミガる將至イデイタるべしと。僧ソウまゝ喜ヨロコビて。水
瓶ビンを傾カガムりて龍リウ小授サツく。一滴イツツツ許ガリの水ノミを受ウケけ。龍喜リウキびて僧ソウ小
教コウへて云く。努ヌメく怖オソる事コト无ナクして。目メを塞フタぎて我ワレ小負オハれ給タマフふ
言コトふ。此恩コノオン更タラシ小世セくは忘ワスレきじと云ふ。爰タラシに龍忽タラシに小童コドウの形カタと
現アワれて。僧ソウを負オハて。洞ホトを蹴破ケヤグして出デる間ホト。雷電イカヅチナリカミドケ霹靂ライして。空陰ソラノクモ
り雨降アメこと甚イニ怖オソい。僧ソウを身振ミミひ肝迷キモトヨひて。怖オソいと思オモへども。龍
小睦ムツひ思オモふが故ユヘに。念ネンじて負オハれ行く程ハカリ。須臾スズ小比叡山ヒイの本
坊ボウ小至キる。僧ソウを椽ケラ小置オキきて龍リウを去サぬ。

龍リウの人語ノヒトコトを成ナせる事コトを。漢學カンガク者ノの見狹ミヤき倫リンを。疑ウタガハふも有アルべ
し。神カミ小入イリるときは。物モノとちて人語ヒトコトを成ナさるは。あれを。

人のみぞ。物と語を通ずるおと能を。此をよく古學
成して辨ふべし。はる龍の水を得ては。其自在かくれ如く。
水を失ひて。怯きおと蚯蚓ミズズミ異あらざ。

彼房の人。常の霹靂して房は落懸ると思ふ程。俄坊の
邊暗夜ヤミノヨれ如く成て。暫許ありて見れむ。一夜俄失ウセし僧椽
ま在。坊の人奇異アヤシく思ひて問ふ。事の有様を委く語る。人
皆聞て驚オドロき奇異アヤシぐゆり。其後。龍彼天狗ウラミれ怨を報せむ為
小。天狗を求むる。京小知識を催モヨホは荒法師の形カタチと成て行カミヒり
ゆ。龍降クダりて蹴殺ケコロしてり。然れを翼折ツバサヲレる屎クノヒ糞ヒあてあむ。
大路小踏フミれり。龍を僧の徳小依て命を存し。僧を龍の力小

依て山小返る。此も機縁ある。ば。此事は。彼僧の語傳を聞繼
て。語を傳へし。依ありと有。て。

但し此物語。僧の房小返カヘりて迄の事を。僧れ語する。あて
知らるれども。其後。龍の天狗を蹴殺ケコロし。依事は。如何イカニて
て知らむ。此も雷電霹靂して。荒法師を蹴殺し。ある。古屎
鳶トビと成て大路小在りるを。彼僧れ物語り小思ひ合せて。加
く語を傳へし。依あり。

はる天狗の正。佛と現じ。る事も。同書小。延喜。天皇の御
代小。五條。道祖神の在る處小。大なる實成らぬ。柿木有り。り。
其木の上。俄小佛現アラれ。依事有り。て。微妙き光を放ち。様

様の花を令降^{ツラギ}あどて。極めて貴^キかたじけなく。京中の上中下
此人^{ベウテアツ}詣集る^{カギリ}おそ限^{カギリ}あり。車も去敢^{サリヌ}まかく喰^クるやど。既^{スデ}小六七
日の成りぬ。

此^{コノ}據^ツて思い合さぬ事あり。其^{コノ}万葉集^{マンヤクシュ}に玉葛^{タマカサ}實成^{ミナナ}
らぬ木^ナは千早振^{チハヤビ}神を招くとふねらぬ木^ナおとふ。有^{アル}る
は。かゝる事を詠^ユるあり。實^ミねらぬ木^ナとは。梯栗桃^{カキクリモ}などの類^{タビ}
の。實^ミれ成^{ナリ}べき木^キて實^ミねらぬを云ふ。然^サれど實^ミの形^{カタ}るも。
此^{コノ}樹^ツども此^{コノ}常^{トコ}にて成^{ナリ}はき實^ミの成^{ナリ}らぬを變^カりあり。其^{コノ}常^{トコ}あら
ば變^カる^ルが。則^{スナハチ}妖魅^{ヨウメイ}の託^ツく所^{トコロ}あり。此^{コノ}歌^{ウタ}も正^{タダ}しき神^{カミ}の事^{コト}小
そ非^ヒず。鬼魅^{モイ}の類^{ルイ}を云へるなり。其^{コノ}千早振^{チハヤビ}と有^{アル}るて

も知^チべし。此^{コノ}人^{ヒト}の解^{サト}得^エる事^{コト}あり。故^{ユヘ}に少^{イサ}う注^ツし。斯^カ
有^{アル}れど。然^サる木^キども有^{アル}あむふも。速^{スミヤカ}に伐^キ棄^{スツ}べき事^{コト}小^コる。

其時^{ミナトキ}小光^{コミツ}右大臣^{ミナモトノナリ}も云^{イハ}人^{ヒト}あり。深草^{フカキ}の天皇^{ミカド}此^{コノ}御子^{ミコ}あり。身^ミ才^サ賢^{カシ}
く智明^{チメイ}ある人^{ヒト}あり。此^{コノ}佛^{ブツ}の現^アじくる事^{コト}を。頗^{スグ}る心得^{ココロエ}を思^{オモ}ひ。
實^ミの佛^{ブツ}此^{コノ}木^キ末^{ハタヘ}に^ニ出^デ給^{タマフ}はき様^{サマ}あり。此^{コノ}天狗^{テング}などの所^{トコロ}為^ナ
あそ有^{アル}めき。外術^{ガイジュツ}を七日^{ナナヒ}過^スぎ。今日^{コンニチ}我^ガ行^{ユク}て見^ミむと出立^{デタテ}給^{タマフ}ふ。
外術^{ガイジュツ}とは外道^{ガイダウ}の術^{ジュツ}といふ事^{コト}あり。佛法^{ブツポフ}より外^{ガイ}此^{コノ}術^{ジュツ}をいふ
語^ゴあり。大論^{ダイロン}小委^{コウイ}しく見^ミえとあり。

装束^{ソウソク}直^ナくちて。櫛^シ櫛^シ毛^モの車^{クルマ}に乘^{ノリ}て。前駈^{マヘ}あど直^ナしく具^{タメ}して。其^{コノ}
處^{トコロ}小行^{コウキョウ}給^{タマフ}ひ。若^{ニハク}干^{カン}詣集^{キダツ}れる人^{ヒト}を拂^{ハラ}ひ去^{イダ}させ。車^{クルマ}を搔^{カキ}下^{サゲ}し。榻^{シヤ}を

立^{タテ}車の簾^{スダシ}を卷^{マキ}上^アりて見給へむ。實^{ミコト}小^コ木^キ末^マ子^シ佛^{ブツ}在^{アリ}り。金色^{キンシキ}の光^{ヒカリ}を放^{ハナ}ちて。空^{ソラ}より様^{サマ}々の花^{ハナ}を降^{ハラ}りて。雨^{アメ}の如^{ごと}し。見^ミ小^コ實^{ミコト}子^シ貴^キきと限^{カギリ}なし。而^{シカ}る小^コ大^{ダイ}臣^{シン}にこむる。恠^{アヤ}しく覺^カえ給^{タマ}ひられむ。佛^{ブツ}小^コ向^{ムカ}ひて目^メ次^ジも瞬^{タタ}くばちて。一時^{イチジ}をうり守^{モリ}て給^{タマ}けむ。此^{コノ}佛^{ブツ}暫^{シラ}くある光^{ヒカリ}を放^{ハナ}ち。花^{ハナ}を降^{ハラ}しあど一^{ヒト}りき。強^{ツヨク}は守^{モリ}る時^{トキ}小^コ。倅^{ハニ}て忽^{タチニ}ち大^{ダイ}ある屎^{クノヒ}鷄^ヒの翼^{ツバサ}折^ヤる小^コ成^{ナリ}て。木^キ上^{ウヘ}より土^{ツチ}に落^{オチ}てふ。めくを。多くれ人^{ヒト}此^{コノ}を見て。奇^キ異^イありと思^{おも}ひて。小^コ童^{ドウ}部^ブとも寄^ヨりて。彼^{カノ}屎^{クノヒ}鷄^ヒを打^ウ殺^{コロ}してけり。

和名抄^{ワナヒナ}云^{イハ}。鳩^{トビ}一名^{ヒトナ}鷲^{シウ}。和名^{ワナ}土^{ツチ}比^ヒ。爾雅^{ニルガ}注^{チュ}云^{イハ}。鷲^{シウ}一名^{ヒトナ}鷲^{シウ}。喜^キ食^{シク}鼠^ソ而^{シテ}大^{ダイ}目^メ者^{モノ}也^{ナリ}。漢語抄^{カンゴ}云^{イハ}。久^ク曾^{ソウ}止^{トビ}比^ヒとあり。寺嶋良安^{テラシマ}云^{イハ}く。

鷲^{シウ}狀^{シヤウ}似^ニ鷲^{シウ}而^{シテ}羽^ウ毛^モ疎^ソ。飛^{トビ}翔^{キョウ}不^フ能^ナ鷲^{シウ}鳥^{トウ}。但^タ攫^{ツカ}牛^ウ馬^バ枯^コ糞^{フン}。或^ハ魚^{イサ}物^{モノ}鳥^{トウ}雛^{チナ}食^{シク}之^ヲと云^{イハ}へり。此^{コノ}は馬^{ウマ}屎^ソ鷲^{シウ}とも云^{イハ}ふ。常^{ジョウ}の鷲^{シウ}より小^コ。稍^{シヤウ}大^{ダイ}小^コ。羽^ウ毛^モ疎^ソひて。汚^{キタナ}く憎^{ニガ}さげ様^{サマ}しる古^コ鷲^{シウ}をいふ。然^サれど常^{ジョウ}の鷲^{シウ}と處^{トコロ}を異^{コト}小^コを處^{トコロ}は非^ヒず。共^{トモ}小^コ交^{マシ}て有^{アル}ぐ中^{ナカ}小^コ。稍^{シヤウ}形^{ケイ}の異^イあるれとあり。合^カ類^{レイ}節^{セツ}用^{ヨウ}小^コ。鷲^{シウ}字^ジまじ鷲^{シウ}字^ジれどを。クソトビと訓^{クニ}み。戴^{タイ}勝^{ショウ}を。マグソツカミヤモ。クソトビヤモ有^{アル}り。偕^{サテ}は。馬^{ウマ}屎^ソ鷲^{シウ}といふ物^{モノ}あり。此^{コノ}は屎^ソある攫^{ツカ}め。鷹^{トウ}の類^{レイ}ひて。鷲^{シウ}とを異^{コト}あり。寺嶋^{テラシマ}氏^シは鷲^{シウ}と。同^{ドウ}じ物^{モノ}小^コ記^キせるは誤^{アタ}り。

大臣^{タシ}は然^サれむこそ。實^{ミコト}の佛^{ブツ}は。何^{ナニ}故^コ小^コ。俄^{トウ}に木^キ末^マ小^コを現^アじ給^{タマ}ふは。きそ。人^{ヒト}の此^{コノ}を悟^{サト}らばして。日^ヒ來^{ライ}禮^{レイ}み惶^{クワ}るが愚^{オロカ}ありと云^{イハ}ひ

て返^{カヘ}て給^{タタ}ひたり。然れど其庭^{ニハ}の若干^{ソコバク}人ども。大臣をある^ホ讚^{ホメ}申^{マウ}り。世人も此を聞^キて。大臣は賢^{カシコ}うなり。人哉^{カナ}と。讚^{ホメ}申^{マウ}りと見え。

身^ミ才^{ノサ}實^エ小^コ賢^{サトウ}き大臣^{大臣}の御^ミり。然れど其^サ實^{サトウ}の佛^{ハツ}をい^イを貴^キくて。木末^{ミノハエ}あど^{コト}う出^デけき物^{モノ}小^コ非^ヒ常^{ジョウ}。を思^{オモ}えれ^レる^ル由^ユあるは。實^{サトウ}の佛^{ハツ}も眞^{マコト}小^コを。屎^{クソ}鷄^ヒの大き^{オホキ}く。殊^{タテマ}う幻^{マギ}通^{ツウ}を得^エる物^{モノ}とち^チも思^{オモ}えれ^レる^ル。甚^{イソハシ}惜^{シヤミ}き事^{コト}あり。此事^{コト}は宇^ウ治^ジ拾^{シツ}遺^イ物^{モノ}語^ゴ小^コも見^ミえ^ルま^マば。合^{アヒ}せ見^ミて舉^{アゲ}る。

は^ハと十^{ジュ}訓^{クン}抄^{シャウ}。後^{ノチ}冷^{レイ}泉^{セン}院^{イン}の御^ミ時^{トキ}。天^{テン}狗^コあま^マて。世^セ中^{チュウ}騷^{サウ}う^ウ有^{アリ}け^ケる頃^{コト}。西^{セイ}塔^{タツ}に住^{スミ}る僧^{ソウ}。白^{アカラサ}地^ヂ小^コ京^{キョウ}う出^デて帰^{カヘ}る。ふ。東^{トウ}北^{ペキ}院^{イン}の北^{キタ}

は^ハ大路^{ダイロ}小^コ童^{ドウ}部^ブ五^ゴ六^{ロク}人^{ニン}は^ハう^ウ集^{ツク}りて。物^{モノ}を打^{ウチ}領^{リョウ}じ^ジる^ルを。歩^フみ^ミ寄^{ヨリ}て見^ミれ^レど。古^{フル}鳶^{トビ}の世^セ小^コ怖^{オソ}し氣^ケある^ル哉^ヤ。縛^{バク}て搦^{ナク}めて^テ梶^{カキ}小^コ打^{ウチ}り^リ。何^{ナニ}も忌^{イミ}じ^ジれ^レど如^{カク}此^{コノ}ま^マる^ルぞと云^{イハ}ふ^フは。殺^{コロ}して羽^{ハネ}を取^{トル}らむと云^{イハ}ふ。此^{コノ}僧^{ソウ}慈^ジ悲^ヒを發^{ハツ}して。扇^{アウ}を取^{トル}せて。此^{コノ}を乞^{コヒ}取^{トル}て放^{ハナ}ち遣^{ヤリ}け^ケ。世^セの諺^{コトワザ}小^コ太^{タイ}郎^{ロウ}坊^{ボウ}も鳶^{トビ}と成^{ナリ}ては。鳶^{トビ}ご^ゴけの智^チ慧^エあら^ラでれ^レし。や云^{イハ}ふ事^{コト}思^{オモ}ひ合^{アヒ}さる^ル。は^ハと上^{カミ}小^コ云^{イハ}ふ^フ万^{マン}能^ネ池^チは龍^{リウ}の事^{コト}をも思^{オモ}ふ^フ。此^{コノ}鷄^{トリ}を大^{イミ}じ^ジた天^{テン}狗^コありし^シの^ノども。鳶^{トビ}と化^カて^テ捕^トら^ラま^マし^シう^ウば。う^ウく怯^{ツキ}う^ウじ^ジり^リ。ま^マと此^{コノ}事^{コト}。里^リ人^{ニン}談^{ダン}小^コ本^{ホン}朝^{テウ}語^ゴ園^{エン}を引^{ヒキ}て。永^{エイ}承^{ジョウ}の頃^{コト}と有^{アリ}。忌^{イミ}くあ^アき功^{コウ}德^{トク}造^{ゾウ}れ^レてや思^{オモ}ひて行^{ユク}ふ^フ。切^キ堤^{ツツミ}の布^フぞ小^コ藪^{ヤブ}よ

又異様ある法師の歩み出て。後れじと歩み寄りられた。氣色覺えて。傍小立よとて過さむと為る。小彼法師近よりて云やう。御憐れを蒙りて。命生て侍れむ。其悅聞えむとてれど云ふ僧立歸りて得こそ覺え祢。誰人ふと問られむ。然ぞ思ひらむ。東北院の北々大路ふて辛た目見て侍る老法師の侍り。生者を命小過る物あり。斯はうの御志は。争でう報じ申しぐらむ。何事ふても念比ある御願あらむ。一事叶ふ奉らむ。已たう知らせ給らむ。小神通を得れば。何うも叶へざらむと云ふ。淺猿く珍ある態うあ。六うしく思ふが。細やう小云ふ。様ある有らえと思ひて。我も此世の望更み明し

年七十小成れ。然まば名聞利養ハ味氣れ。後世こそ恐しきまども。其をいうで。叶ふ給ふまきは。申小及む。但し釋迦如來の靈山ふて。説法し給ひらむ粧ひある。感あり。免と思ひ遣られて。朝夕心懸りて。見ま欲く覺れむ。其有狀を。あびて。見せ給ふやと云へば。最易き事あり。然様の物效あるを。己が徳と為るなりと云ひて。下り松の上々山戸具して上りぬ。あはし目ぢふさだて居給へ。佛は説法の御聲聞えむ時。目ぢを開給ふ。但し何れ畏て貴しと思ふれ。信をだ小發し給は。己がめ悪からむと云ひて。山の峰々方戸上りぬ。

天狗は此言をよく思ひて。世に佛井の靈驗。まゝ天上極樂
地獄など云ふ處ども哉。人に見ゆるれど。釋魔の變現ある
事を辨ふべし。まゝかく云ひて上れぬ。靈山說法は狀を
止る時のまづおせむやてなり。其由下文を見て知べし。
とばかりして。說法の御聲聞えりまは。目に見開くふ。山を
靈山せり。池を紺瑠璃とあり。木を七重寶樹と成て。釋迦如
來獅子の牀に上におはし坐し。普賢文殊左右に座しあり。菩
薩聖衆雲霞の如し。帝釋四天王龍神八部。所も明く充滿あり。
空よ四種の花降りて。香し風吹き。天人雲に列ありて。微
妙の音樂を奏ふ。如來寶花に座して。甚深の法門を演説し。其

事ぐら。大く心も言葉も及ぐ。暫こそ甚しく學び似せ
たり。興有て思えり。様の瑞相。見る小在世に說法の
砌。小望めるが如し。信心忽ち起りて。隨喜の涙眼に浮び。渴仰
の思ひ骨に徹る間。手を額にあて。歸命頂禮する程。山影
しくはらえき騒ぎて。有ける大會かき消却如く。小失せぬ。夢
れ覺るが如し。おは如何。小あたる事ぞと。忙し騒ぎて見廻せ
む。まゝと有ける山中。草深あり。淺猿あがり。然て有るきあら。祇
は山戸上ぬる。水のみれ程。有ける法師出來て。然む。又
契する事を違へ給ひて。信を發し給へる小依て。護法天童降
り給ひて。何とて斯は。又の信者をば。誑き以て。我等を

責^{サイ}給へる間。雇^{ヤト}ひ集^ツる法師原も。くらき肝潰^{キモツク}して逃去^{ニゲ}す
ぬ。己が片くの羽がひ打きて衝^ツあしとて失^モふりりと見ゆ。
りく宜^{ヨク}くしげふ。護法天童降^スて云くと云ずるを。變現^{ハルヘ}
しる靈山^{リョウサン}狀^{サマ}を止^ヤと依^ヨち布^フふ云へ依^ヨ幻語^{エンゴ}あり。然^サるは護
法天童とて。佛法を護^ゴ依^ヨ物の天上^{テンノウ}に在^アるいふを。佛法の幻
説^{セツ}のこそ有^{アル}れ實^{ジツ}に然^シる物に有^{アル}るに非^ヒざれをあり。偕^{サテ}これ
事は本朝語園にも見えあるが。共^ニる本は今昔物語集に記
せるを採^スれてと思^フえ依^ヨ。但^シ今傳^ツる今昔物語ふを比叡
山天狗報助僧恩語^{テンノウハクシュソウオンゴ}といふ題のみ有^{アル}て。文^{カキ}を闕^{ケツ}り。必^{カナラ}此
を採^スるに依^ヨべし。是^レら正^タしく形^{カタ}を古屎^{フルクリトビ}鷄^{トビ}に受^{ウケ}て。幻通^{エンツウ}の

る天狗あり。

抑^{ツモク}釋^{シツ}魔^マの鷲^{リウ}ま^マ鷄^{トビ}の形^{カタ}を受^{ウケ}る事は。上^{ウエ}に論^{ロン}へる如^ニく。天狗と
いふ物に。元^{もと}より狗^{イヌ}にも狸^{タヌキ}にも似^ニたるが。高鼻^{タカハナ}長喙^{チカクビ}みて翼^{ツバサ}あ
り。此^レをも種^{シユグ}々の鳥獸^{トリカミキ}も化^ナれど。鷲^{リウ}の化^ナも依^ヨ多^タるを。山
人^{サン}説^{セツ}あまは。其部^{シブ}に入る故^ユ。此^レ形^{カタ}を受^{ウケ}る形^{カタ}に依^ヨし。

但^シそを皆^{みな}がら。一様^{イツサマ}の形^{カタ}とは聞^キえず。人體^{ニニ}のまゝ。小高鼻^{コタカハナ}
れるも有^{アル}る。まゝ翼^{ツバサ}に有^{アル}るも無^{ナシ}きも。交^{マシ}は依^ヨと見えたり。諸
國^{クニ}里^リ人^{ジン}談^{ダン}といふ書^{シヨ}に。駿河遠江の境^{サマ}ある大井川^{オホイガハ}まで天狗
を見^ミえたり。聞^キれる夜^ヨの深更^{フカシ}に及^{およ}びて。潛^{ヒシカ}に封壇堤^{フデツツミ}の陰^{カゲ}
に忍^シびて伺^{ウカ}ふに鷲^{リウ}の如^ニくある。翅^{ツバサ}の徑^{ワタリ}六尺^{ロクシツ}なりと云^フる

大鳥の様ある物川面カハツラ小あまゝ飛來上下リとて魚をと
る様あり。人音コノコトを忽ト去る。是を俗小いふ術コノハあき。木葉
天狗れどいふ類小やと見ゆ。遠江國人中村眞幸云ひける
は正マサしく其形を見し事は無れど。秋葉それ外高き山
る。夜ヨル天狗の火とて數多見ゆる事あり。其火の狀サマト雷ライりて
在るうと見れむ。遙ハルカ小飛去トビサリあと見み見えミ又み。樹間コノマに出沒イデイリ
を倣事ナカなり。又時ヨリとして。彼物の噂ウサハれど何ナニしハは小云フとた
は其火忽ト目メ近チカく來りて煌キラく事有り。大うと件ケンの火は見
ゆるを。夏の事あるが電イナダリ雷ライの音聞ゆれむ。有アルはる火ども
次ツギく小去失サリウセぬ。其ちま雷ライ聞えぬ方カタ所トコロ逃ニゲ行くやうふて。終マタ

小見えぢあアぬ。是を常の事あれむ。必カナラ其形を見る人有べ
しと云イハり。又疫病痘瘡神スベあハと。都スベて妖魅マカモノれ類タカヒの雷ライを怖オソる
事思おもひ合あさハ依ヨ。

然シカれども然サる忌イミしき形を受るは。大天狗小天狗あといふ強
猛ヒカな依ヨ釋魔シヤクマあるが。高タカくも卑ヒクくも尋常ヨソツネの無智ムチなる僧ソウも。屎シ鷄キ
とも形カタく。凡タラの鷄キと成ナリせ見えミえスとて。

其ソノを法師は。摠ツツじて人の門カド小立タテて。物モノ乞コふ倫タカまでも。自然オノツカラ小
貢高邪慢フカれ心ココロ淡フカく。吾オレこそ最無上の尊タカき道ミチを行ユふ。聖ホウよと
思おもひ顔ガハふて。俗家を凡夫イハと陋イハしむる心ココロを。ほゞくハく有アリて。
有智無智を云はイハす。俗家の物を掠カスめ取らむと欲ホリする心ココロ。常

み見ゆるを。驚まゝ鳶はも。竊を伺ひ。人の手小持する物を
少ず小。抓去らむと欲するが。其性の似たる故。互に生れ
變ふるや有らむ。但し此を試小云ねみ。因に云ふ。先年
我許小使へてし男の。遠江國人あるが云くるは。吾郷の邊
に。天狗の漁獵と云ひて。池まゝ堀れどの魚。大き小さに悉
小死てある事有。然る小其魚。目一筋もなし。此を皆彼物
の取食へ依ありと云へり。天狗をける業もける事小や。俗
諺。悪かしく。人の見ぬま小物に依を。眼をぬくと云事
あり。此天狗に所為より云ひ出さるる。

然るは沙石集小。和州菩提山の本願僧正に房子。忠寛正信房

と云僧有。餘り小眠りまむ。眠正信房とぞ云らるとて。是
が甚しく眠れる事どもを記し。諸其死るる後の事を記して。
近おろ興福寺の東門院小有る。兒隱所小居ありける小。春
日山の方あり。鷄一羽來りて。此兒の前小眠り居り。怖しき
小。腰刀を抜てはと切て。やがて絶入しある依を。人見お
りて。房へうた入きて祈り。刀小血付き鷄の毛散らり。て。
口走りて。忠寛が何とれく眠居るを。過る事易うら
ばとぞ云くる。とかく祈あしらへて。別事無。先生小眠
てし。生を隔ても眠る小こそ。習因習果といふ事あり。
辨り知べし。常小心り思。身子馴ぬる事を。生を經れども

相次て忘れず。捨難くして。自然小為られ思ふ也と有り。
習因習果の説實小然る言あり。心有らむ人々。よく此理を
思ひて。常此因を神の道に習ひて。神の道に果を得む事哉
思ふべき。

はく舊き諺も。鶏を天狗の乗物といひ。山伏の果を鶏小成
とも云ふれり。無智に尼法師山伏をば。大凡鶏と成りて。天
狗に下使を為て。人間小神に守りき透間を伺ひ。妖魔の入る
手引を成る物と見えたり。

鶏は天狗の乗物と云。諺を。源平盛衰記に。治承元年四月廿
八日の大火に處小。指巫と名を得る盲卜者。火本ハ極

口富小路と云。城聞て。占は推條口占とて。火口と云ふは燃
廣からむ。富小路と云へむ。鶏は天狗の乗物あり。小路を歩
む道あり。天狗を愛宕山に住めば。天狗に所為りて。翼の極
口より。乾の愛宕を指て。筋違さま小焼にぬと覺ゆ。と云へ
流由見えて。果して其言の如く焼く。今世も。尻尾に切
ある鳶の飛ぶあと有る邊。ともいふを火災ありと云ひ。
嶋を太郎坊に使者あむ云め。山伏の果を鶏小あると云
おとは。猿樂の梯山伏といふ狂言に言葉小見えたり。共小
舊く然る諺に有し小依りて云へるなり。まゝ梅窓筆記に。
焼亡に太郎次郎と云こ。清辨眼抄。後清録記云。治承二年

戊戌四月廿四日夜半許。七條北東洞院東中許。洞院面焼亡。
世人號次郎焼亡也。太郎、去年四月廿八日。至于大極殿焼亡。
云々と有るも。由有げある事なり。まゝ近き世に記せる書
あれど。新著聞集に。京の釜座下立賣下町に。丹後屋佐兵衛
と云ふ絹屋有し。機を二十四立り。或時機の鳥居に。鵠
をほり居眠り。其翌朝より。一機の糸何とある切り。誰
がわざと穿議しりれども。更に證據も無く。此の如く毎
日切る程に。後には二十四機残らば切し。うは。祈禱を
と修まらふ。糸を切せり。或人云く。今度の次第を思ふに。
憍慢の心より。斯る災の所ありや。最初小鵠に來ても。只

事小非交。愛宕信仰然る。後と云ふは。實尤の事とて。正五
九月に。愛宕山に百味を献り。月詣すべきよし。立願せし
は。災忽り止ふりと云事なり。まゝ下總國香取郡万歳村
ある門人。高橋正雄が語りらく。近き程我が村に。後山へ。村
の者ども五人連立て。木こで小行りぬ。少し傍ある山の
端に。常のよめを汚氣に見ゆる鵠一羽。羽を休め居あり。其
を見て中ある一人が。恐ろしげある山伏に立居と云
ふ。然るに四人の者に。目には。鵠とのみ見ゆれど。云ひ諍ふ
に。彼一人のみ。正しく山伏なる者をと云ひて。更に四人が
言を聞入を。共小山より歸りて。後小彼男忽ち熱さし煩

いて死するが。残り四人を何事も無き。甚異し此事あり
と語るとき。猶山伏も見え。鳶と見えしものと云ふこと。外にも
聞くる事何れと。煩々を悉くを記さず。

於此餘も。釋魔と成べき因縁の語等也。經論も多く見
るを。彼此記さば。ま於楞嚴經。佛告阿難。攝心爲戒。因戒生定。
因定發慧。是名三無漏學。姪心不除。則塵不可出。縱有多智禪定
現前。如不斷姪。必落魔道。と有るは。姪心を斷ざる僧徒の魔道
小墮る證文あり。此に依て熟く古の名僧大徳と聞えし釋
子等の姪事小心を蕩し。倫を按ふる。ま於舊く釋玄昉
は僧正として。光明皇后を犯して。善珠僧正戒生せ奉り。

光明皇后も。藤原不比等の女あり。聖武天皇の后なり。玄
昉も其頃の智識あり。唐土に渡り。種々經論法をも傳來
り。朝廷は更あり。世も重く用られしを。皇后深く愛し給
ひ。玄昉が子を生給へり。善珠僧正是あり。此をもて國史に。
僧正善珠也。光明子也。孽子ありと記されし。然れど天皇
は知看さず。一人も此事を云ひ露る者無し。中にも藤原
廣繼といひし人有て。天皇小玄昉が奸を奏しける。却て
て廣繼を逆鱗有て。筑紫を流し給ひし。は廣繼憤りて謀
反し起しぬ。爰小追討使を遣して誅せ給ふ。其後玄昉を筑
紫の觀音寺に遣し給ふる。廣繼の靈魂雷とれりて。玄昉

が首を拔捨ヌキスデりて。委くも國史を見べし。斯カクて玄昉が靈の
魔道マダウ入る事。太平記ある雲景が未來記を見て知べ
し。其も下アゲ小舉コトとて。

釋道鏡シヤウキョウ也。如意輪法ニギハヤヒを行ユる驗アト小よアて。高野姫、天皇ミコ寵メせ
らミ奉ホウ了。

古事談コトワタシ小。此女帝メノミカド也。天平寶字六年ヘイテイヘイジニ。簪カサリを落オトし佛道ブツダウ入イ了。
法諱フソミナを法基尼フソミナと稱ナヅケし奉ホウる。同七年の九月ニ。道鏡法師ミチキョウホフシを小
僧都ソウトとれし給タマフふ。元モトも河内國人カフチノクニノミコト也。俗姓ソコセイを弓削氏ユキサキノミコトあり。法
相宗フソウシュウ小。西大寺義淵僧正セイトウジヤミエン此門流コノカドナリあり。常トコ小禁掖キンエツ侍シ了。甚
く寵愛キョウアイせらる。如意輪法ニギハヤヒの驗德アトと云へ了。天皇道鏡ミコダウキョウが陰カゲを。

形カタ不足ミナクし思食シヤクされ。薯蕷ヤマイモをもて陰形カゲカタを作ス了。用ヒさせ給タマフふ
小。折フレ籠コモりて腫塞ハレフサガり。大事オホジ小及キぶと也。百濟國ハクセイクニの醫師イシ小。小手
尼ニとて。其手テ嬰子オウシの手テ如ニくれるヲ。見奉ミホウりて。帝疾ミヤノヤミ癒イユべし
也。手小油テノアブを塗ヌ了。取らむと欲ホシり候マコト。右中辨ミナモトノミナト百川ヒヤクマン。靈狐レイコ
形カタと云イハひて。劔ツルギを拔ヌキて尼ニの肩カタを切キる。此コノ小仍ナラて療イユむ事
あハく。崩クニじ給タマフふと有アル了。形カタも道鏡ミチキョウが惡逆アクギャク也。國史コクシを見て知シルべ
し。畏カシコくも天日嗣アマツヒツギをさへヲ窺ウカガひ奉ホウ了也。堪囊抄カンナシヤウ。天皇密ヒツカ小
藤原押勝フジハラヨシカサを幸メし給タマフひ。まマ道鏡ミチキョウを召メカて。寵遇キョウゴ他タ異イあり。此
二人幸人フタヒトノサキニとして。威勢イセ喧アラハレりる故ユヘ也。涅槃經ニハツツキョウ小。所有ソウユ三千界サンサンカイ
男子ナンシ諸煩惱ショボウノウ。合集ヘツシ為ニ一人ヒトヒト。女人之業障オンナノギヤウ。といふ文フミを獻覽ケンラン有アルて。

朕^{ミコ}女人ありと云^{イハ}ずとも。全く此儀あり。佛の妄語ありとて。
經^{キヤウ}小便を爲^シうけ給へり。此經の護法神怒^{イカリ}るや。忽^{タチ}姪^{ミヤ}慾熾盛^{キヤウ}成^{ナリ}て御座^{ミマデ}のみあらば。女根廣博^{ヒロハク}ひして敢^{アハ}て其
欲^{ヨク}を停^トぐとく。天下小勅を下^シして。大根の者を求め給ふ。押
勝^{シカ}其仁小當^{コトウ}しうとも。道鏡れやよく是小叶^{コト}ずりと有^{アル}た。餘^{アノ}
ある事^{コト}は思^{オモ}われど。傳^{ツタ}有る事^{コト}や。女を殊^{コト}に姪^{ミヤ}心深^{フカ}きもの
みもあ^ハま。佛説の如^{ごと}きと。御言^{ミコト}の如^{ごと}く餘ある妄語あり。然^{シカ}る
まか^マる崇^{タカ}れ有^{アル}しは。釋魔^{シヤクマ}能^ノあり。護法神といふ物やが
て其^{ソノ}あり。其由を次^{ツギ}く小云ふを見る^ミる^ミ。
釋玄賓は大僧都^{ソノカミ}あて。當時上下^{ソノカミ}大德と稱^{イハ}せられ。法師の淨

行を云^{イハ}ふも。必^{カナラ}例^{レイ}を引出^{ヒキ}らぬ人^{ヒト}ある。大納言^{ダイナク}ある人の北^{キタ}
方^{カタ}戔^セ懸^ケ想^{サウ}して惱^{ナヤ}み煩^{ワザ}ひ。

今昔物語集。古事談。撰集抄。長明發心集^{ヤムゴト}あどふ。昔^シ玄賓僧都
と云^{イハ}人^{ヒト}有^{アル}り。山階寺^{ヤマカキ}の止事^{ヤムゴト}あき智者^{チヤウジ}の流^{リウ}が。世^ヨを厭^{イハ}ふ心
深^{フカ}くて。寺^{テラ}の交^{マユリ}を好^スまば。三輪河^{ミリンガハ}の邊^ヘに。僅^{レバ}ある草菴^{ソウアン}を結^{ムス}ひ
住^スり。桓武帝^{ケンミキ}の御時^{ミトキ}。此事^{コト}を聞^{キコ}食^シして。強^{ツヨク}召^{メカ}出^デる^ミは。遁^{ニゲ}
べき方^{カタ}れく。愁^{ナニヒ}小參^{ミヤリ}り。然^{シカ}れども猶^{ナホ}本意^{ホンイ}れらば思^{オモ}ける小
や。奈良帝^{ナラミキ}の御世^{ミヨ}。大僧都^{ダイソウド}小成^{コナリ}給^{タマ}ひる。辞^ハ申^{マウ}し。三輪
川の清^{キヨ}き流^{リウ}を穿^スて。夜^ヨの袖^{スエ}を又^{マタ}汚^{ケガ}さじ。と詠^ユて奉^{ホウ}
了^{リョウ}。弟子^{シシ}從^ス者^{モノ}小も知^{シラ}ば。何^{ナニ}地^チとも那^ナく失^{ウセ}ふ^ミる^ミ。其^{ソノ}後^{ノチ}年^{トシ}

來經て。越路此河の渡守と有りて居りしを。弟子ある僧
の。此を通ると此見付しとせしうば。又立去りて後。伊賀國
小。或郡司が家の馬飼をありて、年來經る程。郡司罪有
て處を逐はるはしとて歎きあるを。慰めて京小伴ひ。此時
伊賀國を。昔知る大納言ある人の。給をて有しうば。其
へ行き。郡司の罪を許し給はせしれども。淨行此例も
引出るれど。是より後の事。や。發心集小記せる事。あり。
其を此僧都を忌しく貴き人として。高きも賤ぶも。佛の如く
思ふ。是る中。大納言ある人。年來殊小相憑。給よりけ
る小僧都をよはうとれく惱みて。日頃よりぬ。大納言覺

束あさの餘り小。自渡り給ひて。何ある御心地。小うあど。細
やう小訪給ふを。近く寄給へ。申侍らむと有れど。異くて指
寄給ふる。忍びて聞也。誠小殊。外依病も侍らむ。一日
殿の御許へ詣りし。小。北方の形いと目出度。と見給へ。正
し。城。鬘。小見奉て。のち。物覺え。心惑ひ。胸塞が。て。何
小も物の云れ侍らぬあり。此事申。小。ちりて。憚有れ。と。深く
憑奉りて。久しく成ぬ。争うは。隔奉らむと思ひて。あむと聞
也。大納言驚き。ち。ら。は。何う。と。く。宣。さ。て。し。最。安。た。事。れ
也。速に御惱を止てむ。渡り給へ。何小も宣はむ。俣。小。便。よく
計らひ侍らむ。とて。歸。て。給ひ。上。小。かく。と。聞。え。給ふ。更。あ

とあはれえ子仰られむや。最淺間しく心憂られど。かく懇
小覺し計ふ事あまは。あや辞給はむ。其用意して。僧都が
按内せさせ給へるふ。最う依ちしく。法服正志くして來り
給へり。異しく實くあから文覺めれど。間れど立て。出る様
ある方小入を給ふ。上の美しく取繕ひて居給へるを。一時
はうと起くぐ。や守て。彈指をそ度くあや依。斯て近く
寄こと無て。中門れ廊小出て。物なれむかたて。歸りふけ
まは。主いよく。尊み給ふ事限あし。不淨を觀じて。其執を
ひる返ちれるま。此觀を人身の汚穢しき事哉。思ひ解く
佛の教あり。若人の為ふも愛著し。自も心有らむ時を。必此

相と思ふま。しと云へ。大方人の身は。骨肉れ操り朽る
家の如し。六府五藏れ有狀。毒蛇れ蟠る小異あらま。血を體
をう依やし。筋をちぎ目成扣ちり。僅に薄き皮。一重覆へ
る故ふ。此諸の不淨を隱せ。粉を施し薰物をうちせど。誰
うは偽れる飾と知さ依。海小求え山り得る依味も。一夜經
ぬまを悉く不淨や成りぬ。云は。繪がける瓶小糞穢を入
れ。腐る體り錦を纏へるが如し。譬大海を傾けて洗ふと
も。清淨べうらま。若梅檀を焼て匂はまとも。久しく香しか
らじ。況むや魂去て壽盡ぬる後を。空しく塚の邊小捨べし。
身脹れ腐り乱れて。終小白き骸と成。眞れ相を知る故。

念く小是を厭ひ。愚ある者は。假の色小耽りて。心惑えり。
ちと。譬へを。廁中の虫れ。糞穢を愛するが如し。云云。了りと
有。鴛鴦今按ふ。不淨觀の事。かく言痛く云へきとも。此
を言小云。此みよて。更小驗あき。徒事あり。然るはかく觀じ
て。心の解る物小し有らむ。玄賓僧都。う。此北方。再見えに
とも。前小見て。戀心の起れる時。病付はう。思ひの疑
し時。此觀を為て。其心を解べき。い。う。觀ぜれども。戀
心。此解さ。故。堪。大納言小云。了と聞ゆれむ。
相見ては。倍く小。戀ある心を増りり。然。本意は
遂。て小。此觀を為て。心解る。狀。持成。り。む。或。禪僧

此態とて。人の骸骨をかきて。骨隱。皮小は誰を迷ふらむ。
皮破。まては。か。姿よ。といふ歌を書。有。此も不淨
觀の心あれ。死。後。の骸骨。此。狀。思ひて。現。美し。此
兒を美しと思。ぬ理を。決。て無き事。其を美き。食
物も。食ひて後は。糞とある事を觀。い。とも。美き味を失
は。ると同。理あり。此。思へ。俗の口詠。小。白骨と觀じ
あ。らも美し。やと云へ。中。小面白。り。梵網經
古迹と云書。此身不淨。累骨所成。血肉便穢。薄皮所持。種
臭穢。九孔流漏。不淨。似淨。謂皮上分。白膏。熱血。交所重映。誑心
媚眼。種。燒害。然。諸愚夫。曾。厭背。云。と見え。ま。眞言の

密法。男女の髑髏を合せ。壇におき。彈指して觀ぜる法有
と聞ゆれど。上ふ論する如く。是は採るふ足らぬ。さて
此大納言は誰ありむ。何う釈子哉。信じととも。其北方
をそれ逢しめむと為るは。物よ狂ふ事あり。只不淨觀
をみ為る故。事無れど。誠小かの不淨行を行ひとらむ
小も。其を見ゆ。有む。甚もをこれる大納言。そ在る。依
りて古今集。山田守る僧都の身。そ哀あれ。秋果ぬれを
問人も。好し。といふ歌を。彼僧都れといふ。此實あらば。後
そ人々嫌はれし故。述懷ある。信し。發心集。雲風の如く
遷タビ行ユキは。田れと守る時。も有る。ふや。と有と。然る

心は非ず。山田守と云しは。山田曾保登。僧都を係する
意あり。然れむ。いふ道德カホ顏ガハし。ととも。釋子。心ココロを許ユルす
まじ。死物ありと。

金剛山。行ひ住ける聖人。御門ミカドの御妃ミヤギ。小愛著心を發し。現
小妖魔と成て。燒乱せり。其は今昔物語集。天狗燒乱。語と
いふ條。文德天皇の女御。物氣モノキは煩ワザひ給られむ。其世。小驗有
る僧を召集めて。様々御祈。修法有と。とも。露の驗ありし。

此妃。本書。深殿后と有れど。彼皇后。小御ミコまらぬ。贈正
一位良相公の御女ミメ。多賀タカ幾子キコ。申コトに女御あり。其由。下
小注イふを見て。知べし。此をま。本書。后と有と。女御

と記し於。

而る小大和國葛木山の頂小。金剛山といふ山。一人の貴兒
聖人住り。年トシぶら此處スミへ行ひて。鉢ハチを飛として食ををカぎ。瓶カンを
遣ヤて水を汲くむ。かく行ひ居ゐる程ハ。驗シ立たる。然れど其聞
え高く成なり。

鉢を飛し瓶を遣るも幻術あり。其由別小記せる物あり。而
て此聖人の名は。何ナニと云いひ傳つたへらる。

天皇ミコの由を聞き食しして。彼を召よひて祈いのめむと思おも食しして召よひ
た由よし仰おほ下くだされぬ。

天皇を文德天皇あり。此事は此天皇の末すえ世よ小有ありし事こと也。

元亨釈書キョウキョウを考かんふ所ところ。天安二年此事キョウキョウと通とえらる。而しかど國
史キ小記しされず。其は此書キョウキョウの下文しんぶん云い如ごとく。極きめて便べんあるは憚はげ
ある事ことあるはなるべし。

使つか聖人せいじんの許もとへ行いて。此由このよしを仰おほする。聖人度とく辭ことし申まをせども。
宣旨せんし背そむき難がたたり依よて。遂つい小參さんせぬ。御前ごぜん小召よひて。加持かぢせし免めん給
ふ。其驗けん新あらたし。女御にみよの一人ひとり此侍女しじよ。忽たちに狂くるひて。哭なみ嘲あざわり
走はし叫こゑぶ。聖人弥いく加持かぢする。女縛にめせらるはて打責うちせめらるは間ま懷
中ちゆうより一の老狐らうこ出でて。轉ころもびて倒たふれ臥ふす。其時そのとき小聖人せいじんをもて。狐
を繫つきし免めんて。此このを教しふ。

たゞ狐こ此人このひとを託たくする事ことの物もの小見みる始はじあり。此このを教しふと

を人小託する事れ。畜類とちて有まじ。死事の理れを言
誨せるを云ふや。

女御此病。一兩日の間小止給ひぬ。父良相公此を喜び。聖人
暫く候べき由を仰せ給へむ。仰小隨ひて暫く候ふ間。夏
の事あて。女御を御單衣ばうを著給ひて御ける。御几帳
此帷を風の吹返し。迫より。聖人髣ふ女御を見奉り。見
習はぬ心。端正美麗の姿を見て。聖人忽ち心迷ひ肝碎りて。
深く女御を愛欲此心を發しぬ。然とも為べき方なく。思ひ煩
ひて有る。胸火を燒ぐ如く。片時を思過る。思え。遂
小人間を量りて。御帳の内に入り。女御の臥給へる御腰

抱付ぬ。女御驚き迷ひて。汗水小成て恐給へども。御力小辞得
が。然れむ聖人力成盡して。燒し奉る。女房ち此を見
て。騒ぎ喧嘩時。侍醫當麻鴨繼と云者。宣旨を奉りて。女
御の御病を療治せむ。宮の内小候。殿上の方。俄
に騒ぎ喧嘩する音し。驚きて走入る。御帳内より
此聖人出。鴨繼聖人を捕りて。天皇小此由を奏。天皇大
小怒給ひて。聖人を搦めて。獄に禁ぜらる。ぬ。

文德天皇御紀。齊衡三年二月辛巳。當麻真人鴨繼。為典藥頭
侍醫。筑前介如故。と見也。されど心得が。死事なり。其由下
に云ふを見る。し。

聖人獄に在りて。更云事無して。天小仰ぎて泣く誓云く。我
忽小死て鬼と成て。此女御のせう在はさむ時。本意の如く
女御を睦み奉らむと云ふ。獄司の者此を聞て。父大臣は此事
を申に。大臣聞驚を給ひて。天皇小奏し。聖人を免して本れ山
に返し給ひぬ。然れを聖人本れ山に歸りて。此思ひ小堪は
て。女御小馴近付き奉るべき事を。強小願ひて。憑む所の三寶
小祈請と云ふとも。現世小其事や難うなりむ。本れ願の如
く。鬼は成むと思ひ入て。物を食ざりければ。十餘日を経て餓
死なり。其後忽小鬼とありぬ。其形身を裸小して。頭を禿あり。
長八尺許小して。膚黒きこと漆を塗れるが如し。目は錠を入

るが如く。口廣く開て。劔の如くなる齒生なり。上下小牙
を食出し。赤き襦衣を搔て。腰小槌を差なり。此餓鬼俄に女御
の御まに。御几帳の喬小立なり。人々現に此を見て。皆魂を失
ひ。心を迷はして。倒れ迷ひて逃ぬ。女房あどは此を見て。或を
絶入り。或を衣を被りて臥しぬ。而る間小此鬼女御を懷きて。
狂をし奉りまば。女御いぞ吉く取疏びて。打咲て。扇を差隠し
て。御帳内小入給ひて。鬼と二人臥させ給ひたり。女房あど
聞られむ。只日来戀しく。侘うとある事共をぞ鬼申り。女御
も咲嘲らせ給られむ。女房とち皆逃去なり。

三寶の驗大要かくの如し。諸の人には有のはる。鬼と見

ゆれど。女御も美しき男も見えりむ故。かく姪れと
御行ひて。有しと通えとぞ。

良久しく有て。日暮る程。鬼御帳より出て去りまを。女
御何も成らせ給ひぬらむと思ひて。女房より急ぎ参れば。
例う違ふこと無して。然事や有らむと思召と。氣色も無
てぞ居させ給ける。少し御眼見ぞ。怖し氣ある氣付せ給ひ
りる。此由を内小奏りれむ。天皇聞食して。奇異く怖しき
も。何う成せ給ふむらむと。歎け給ふ事限れし。其後此鬼
毎日小同じ様子参る。女御も心肝も失給はせし。現心
をれく。此鬼を媚しき者も思食ふりて。然れむ宮内の人皆

此を見て。哀しく。歎き思ふこと限あり。而る間。此鬼人
小託りて云く。我のれら。彼鴨継が怨を報むと。鴨継此
を聞て。心小恐怖る。間。その後幾程を経ずして。ふはあま死
り。まゝ其男三四人有しも。皆狂病ふて死りて。

鴨継も。清和天皇紀。貞觀十五年三月八日の下。從四位下
行主殿頭。兼伊豫權守。當麻真人鴨継卒とあり。然る小此妖
事ハ。天安二年の事。貞觀十五年より。十六年以前乃事
あれむ。極めて餘人ありむ。

然まば天皇立ち父大臣。此を見て極く恐怖れ給ひて。諸の止
事れき僧共をもて。此鬼城降伏せむ事を。勸め祈らせ給る

小^{サマ}様くの御祈共此有る^{ヒレ}驗ふや。此鬼三月許を不參り^{ミヤラザリ}まは。女御此御心も直り^{ナホ}て。本の如く成給ひ^{ナリ}けまは。天皇聞食し喜^{ヨロコ}むせ給ひて。今一度見奉らむとて。女御宮より行幸有る^{ミユキ}り。例より殊^{アラ}る。哀^{アハレ}れ依御幸ありとて。百官これ仕^{ツカサリ}り。と。

此^{コノ}の文勢^{フミノサマ}を見る^ミふ。今度の御幸は。此女御のかゝる^{コノトキ}燒乱小逢^{アヒタヘ}給む。以來は御幸^{ミユキ}なりじと。思食^{オホシメ}し定給^{オホシメ}ふ物あら。然^{シカ}まが小哀^{アハレ}る思食^{オホシメ}る方はありて。一期の見納^{ミヨサ}えとも思食^{オホシメ}して。入御^{イリミ}あらせ給へると知^{シラ}る^{イハ}る。最哀^{イトアハレ}ある御事ありかし。天皇既^{スデ}に宮小入らせ給ひ。女御を見奉らせ給ひて。泣^{ナク}く哀^{アハレ}ある事ども申させ給ふ^{モウサズ}ば。女御も哀^{アハレ}る思食^{オホシメ}る^{モウサズ}。形も本の如く

ふて御^ミま。而^サる程小例の鬼^{スミ}。俄^{スミ}小角^{カク}より踊^{ヲド}り出^デて。御帳の内^{ミツ}に入^{イリ}り。天皇此^{アハレ}を奇異^{キイ}と御覽^ミる間^{マヒ}。女御例の有様^{ミヤリサマ}ふて。御帳の内^{ミツ}に急^{イッ}ぎ入^{イリ}て給ひぬ。暫計^{シバカリ}有りて。鬼南面小躍^{ヲド}り出ぬ。大臣公卿より始^{ハジ}めて。百官これ現^{ウツ}小此鬼を見て。恐れ迷^{マヨ}ひて。奇異と思ふ程^{イリツツ}。女御まゝ取次^{トリツツ}きて出させ給ひて。諸人^{モロビト}の見^ミる前^{マヘ}ふて。鬼と臥^フさせ給ひて。艶^ミく見^ミ苦き事をぞ。憚^{ハシ}る處もれ^{トコロ}く為^セさせ給ひて。鬼起^{オキ}ふりまは。女御も起て入らせ給ひぬ。天皇為^スべき方^{カタ}なく。思食^{オホシメ}し歎^{ナゲ}たて返^{カヘ}らせ給り。我^{スメラ}が天皇命^{ミコト}はしも。挂卷^{カケマキ}を畏^{カレコ}き。天照大御神の美麻命^{ミマノミコト}は御^{オシ}

まして。其大宮を。大御神と共殿^{ヒトツミアラカ}小御座^{オシマ}にべき宮小^{ミヤコ}し有^{アリ}ま

む。假カふも穢キタき法師あどをば。近付チカツ給ふまじ。死事ある。或用
明天皇の御世。小。聖德太子也。蘇我馬子が心とちて。豐國トヨクニの
名もれき法師を。禁裡ミヤヌチ小入給へるよ。事始コトハジまりて。後ノチくを
然サる古れ道よを思召さ。天神地祇の御政事ミツリゴトをば。麓略オロソカ小
成ー給ひ。何事小付ても。法師を召て物せさせ給ふ事と成
しうば。皇神等スメガミタチの御守り薄く成し故小。をもれむ。法師の
妖事アキコト逢給ふこと多く。斯有カレいみじき妖魔の燒乱をさ。予
小。受給ふ事も有し。悲カナシとも悲し。死ね。非ざらめや。
然シカまば止事ヤムゴト無らむ女人は。此事を聞て。專モハラ小法師をば。近付べ
うら。此事極免て。便イハなく憚有ハバカリ事あれども。末世の人小

見しめて。法師近付うむ事を。強小誠めむが為小。かく語り
傳ふと有。二。

末世人小。小見し免て。法師近付うむ事を誠免む。加
く憚有ハバカリ事をし。秘カクさに書殘され。撰者の心イトを。最も
頼タ免し。かり。上ある玄實僧都が。と。下記せる志賀
寺の上人。清水寺の光別當が事。あ。思ひ合はべし。

是よ。後れ事。宇治拾遺物語。女御物氣小。惱ナヤみ給るを。
本書小。此は深殿后と有。ま。誤あり。そは下。元亨釈書。成
引て注を見て知る。三。

或人申けるを。慈覺大師の弟子小。無動寺の相應和尚と申こ

そ。いみじた行者ふて侍れと申られむ。召小遣を以。即御使小
連きて参りて。中門より立ち上り。人々見まは。丈高き僧の鬼に如
くある。信濃布を衣著て。梶の平足駄をはき。大木榎子の
念珠を持ち。其鉢御前より召上べき者小非。無下れ下種法
師小こそとて。只簀子の邊より立ち上ら。加持申べいと各々申
して。御階の高欄に本より立て。立れば候へと仰下しけむ。御
階の東に脇乃高欄より立ち上ら。押懸て祈奉る。女御は寢殿
に母屋小伏給ひ。いと苦氣ある御聲。時々御簾の外より聞ゆ。和
尚纔よその御聲を以て。高聲より加持し奉る。人々身の毛
よだちて思ゆ。暫し有れむ。女御紅の御衣二計より押包まれて。

鞠の如く簾中より轉び出させ給ひて。和尚の前は簀子より投
おき奉る。人々騒がていと見苦し。内より入せ奉りて。和尚も御
前より候へと云ふ。和尙かゝる乞食の身より候へむ。争う
罷り上らば。更に上らば。始免上られざしを。安から
む。憤思ひて。只簀子より。女御を四五尺あき。打奉る。人々お
わびて。御几帳とも。差出して立隠し。中門をさして人々拂
き。とも。極めて顕露あり。四五度ばかり打奉りて。投入し。祈
りまむ。本に如く内より投入れり。

元亨釈書小。下より引く如く。神の投出する由云へり。但し
此は佛法の異術にて。餘慶僧正と云し人も。此法を行へり。

其を古事談小。文範、民部卿の餘慶僧正を貴に驗者として。
人れ妻を犯さゆくと云れりるを。僧正此由を聞て忽小
民部卿の許に渡られり。主其心を得て、所勞の由云て
會さるまは。僧正大事ある事。自聞えむと有りれど。出さ
るる時小。然らむ投出せと加持せられまは。屏風の上
より投出して。惑ひむく免れりる時。僧正さあそとて歸ら
まけ。民部卿も三日許死するやう小て。悩み臥まり。是
小因て。子ども二人を僧正小奉りて。免されて命生小け
こと有り。大うく世に驗者と稱ゆ。僧らは。かゝる幻術を
用ひて。異驗を見ゆるなり。此事も十訓抄小も記せる。

を。校合せて舉る。○校者等云く。此民部卿の言小。餘慶僧
正を驗者と云ひて。人れ妻を犯さる。軟と云れするを思
ふは。其頃れ僧徒の。驗徳くと聞ゆ。依者を。其小事託せて。
姪事を行ふが多かる故。然云れする事を思はる。抑これ
僧正小。さる事有や無しや知ら終と。此前後に舉られする。
名僧大徳と聞えし。法師等此事を思ふるも。世に語り傳へ
ざる。濫行の殊に多有りむこと。推量され。但し彼善珠
僧正れ如き。正しく孽子と知れらむを。然ても有あむ。若
も其事の知れざらむは。人の血統も乱る。いさく重
き枉事あるを。世に人々。僧とし云へむ老少を云え。女の

馴近^{ナリ}於^ニくを忌^イはしとも思^{オモ}はるは。深^{フカ}く彼^カ道^{ミチ}小^コ誑^{マドハ}惑^{マドハ}せられ
るるが故^ユあり。返^{カヘ}まぐ異^{アラ}しき驗^{ケン}德^{トク}ありかし。諸^{モロ}此^{コノ}民^{タチ}部^フ
卿^{ケイ}。この事^{コト}小^コ心^{シン}著^{シラ}れ。然^サる事^{コト}あれど。元^{モト}より學^{ガク}力^{リキ}薄^{ウス}く。
其^{ソノ}魂^{タマ}れ居^スて固^{カタ}からざる故^ユ。妖^{ヤウ}僧^{ソウ}の幻^{マギ}術^{ジュツ}。屏^{ビョウ}風^{フウ}の上^ノよて
投^{ナゲ}出^{イダ}さむ。三^{サン}日^{ニチ}が程^{カラ}辛^{カラ}死^シ目^メ見^ミゆ。剩^{アリ}さへ己^ミが罪^{ツミ}とや思^{オモ}え
れりむ。子^コ等^{タチ}二人^{ニヒト}を法^{ホフ}師^シ小^コ成^{ナレ}て。其^{ソノ}由^ユを謝^{アヤ}され。事^{コト}と聞^キ
あるは。いと怯^{ツク}く。片^{カタ}腹^{ハラ}痛^{イタ}き事^{コト}小^コこそ。

其^{ソノ}後^{ノチ}和^ワ尚^{ショウ}罷^バて出^イるを。あはし候^{サツ}へと止^トむれども。久^{キウ}しく立^タ
腰痛^{コレイタ}く候^{コト}とて。耳^{ミミ}ふも聞^キ入^イまば出^イぬ。女^メ御^ミを投^{ナゲ}入^イられて後^{ノチ}物^{モノ}
氣^キさえて。御^ミ心^{シン}地^チさはやうに成^{ナレ}給^{タマ}ひぬ。驗^{ケン}德^{トク}新^{アラタ}ありとて。僧^{ソウ}都^ツ

小^コ任^ニ者^{モノ}なき由^ユ哉^ヤ。宣^{ノボ}下^ゲせられども。箇^カ様^{ヤウ}のかゝぬ。何^{ナニ}條^{ジョウ}僧^{ソウ}綱^{コウ}
う成^{ナレ}べやとて。返^{カヘ}し奉^{ホウ}ると有^{アル}也^ヤ。

深^{フカ}殿^{テン}后^{コウ}の眞^{マコト}濟^{セイ}僧^{ソウ}正^{マサ}に靈^{レイ}小^コ。惱^{ナウ}され給^{タマ}ひし事^{コト}も。下^{シタ}り舉^{アゲ}る如^{カド}
く。諸^{モロ}書^{ショ}小^コ見^ミされど。金^{キン}剛^{コウ}山^{サン}に聖^{セイ}人^{ニン}の靈^{レイ}小^コ。燒^{ヤク}乱^{ラン}せられ給^{タマ}ひ
し事^{コト}は。今^{イマ}昔^{セキ}物^{モノ}語^ゴより外^{ソノ}に所^{ショ}見^ミあり。爰^{コゝ}り元^{ゲン}亨^{コウ}釈^{シャク}書^{ショ}ある。相^{サウ}
應^{オウ}和^ワ尚^{ショウ}傳^{デン}を考^{カウ}ふる小^コ。天^{テン}安^{アン}二^ニ年^{ネン}藤^{トウ}妃^ヒ名^ナ多^タ賀^カ幾^キ子^コ。良^{リョウ}相^{サウ}女^メ。嬰^{オウ}
狂^{キヤウ}病^{ビョウ}。万^{マン}方^フ不^フ愈^ユ。藤^{トウ}公^{コウ}延^{エン}應^{オウ}。應^{オウ}入^{イル}宮^{ミヤ}。妃^ヒ隔^{カク}屏^{ビョウ}而^{シテ}臥^シ。應^{オウ}持^チ呪^{ソウ}。不^フ久^{キウ}神^{シン}
擲^テ妃^ヒ於^ニ屏^{ビョウ}外^{ガイ}。飛^{トビ}而^{シテ}至^シ應^{オウ}前^{マエ}。舉^テ聲^{セイ}叫^{ケウ}呼^コ。應^{オウ}曰^{イフ}可^カ還^{エン}本^{ホン}所^{ショ}。妃^ヒ騰^{トウ}飛^ヒ入^{イル}
帳^{テウ}中^{チュウ}。頃^{キン}刻^{コク}靈^{レイ}託^{トク}妃^ヒ。陳^{チン}謝^{シャ}狂^{キヤウ}病^{ビョウ}速^{ソク}息^{ソク}。貞^{テイ}觀^{カン}三^{サン}年^{ネン}藤^{トウ}妃^ヒ又^{マタ}病^{ビョウ}。藤^{トウ}公^{コウ}又^{マタ}
召^{メカ}應^{オウ}。應^{オウ}加^カ之^ニ便^{ベン}愈^ユ。藤^{トウ}公^{コウ}大^{ダイ}悅^{エツ}。與^{ヨリ}巴^ハ子^シ國^{コク}寶^{ホウ}劍^{ケン}。是^{コト}從^{ヨリ}唐^{タウ}國^{コク}所^{ショ}送^{ソウ}特^{トク}

爲奇寶者也と有^{コレニサ}。是正^{コレニサ}宇治拾遺の事實小同じ。けり。深
殿、后の事は。此後の事とて別^{ワカ}に記せり。然れども今昔物語。
宇治拾遺小。深殿、后と有^{コレニサ}。良相公は御女。多賀幾子の事
を。事實に似^ニたる故小誤^{アヤ}れるなり。相應を慈覺大師は弟子
なり。良相公は代りて。剃髪せし僧小て。其薙染の時。師
告て。藤公索^ス度者。是汝良縁之相應也。今名^ナ汝以^ニ相應^ヲ。蓋取^ス藤
公一字也。とて。負^ツたる由あり。旁^{カタ}く由ある事あり。天安二
年。此年の八月小。文德天皇崩御ありし。其前後小。深殿、
后の悩^ナみ坐る狀^{サマ}。國史にも見え。多賀幾子を女御に御^{オシ}け
せは。元より其事の見えざる。然るべき事あり。

釋、眞濟を僧正あり。深殿、后に想^{オモヒ}を懸^{カケ}て。妖魅とありて悩^ナま
し奉^{タテマツ}り。其を古事談ふ。貞觀七年のあり。深殿、大后天狗の爲
小悩^ナされ。稍數月を経る小。諸有驗^{モト}に僧侶。あへて能^{コト}く此を降^{クダ}
に者あり。

深殿、皇后を。文德天皇の御后。清和天皇は御母に坐^{マシ}まし。御
名を明子を申し。大政大臣良房公の御女あり。深殿を處^{トコロ}名
めて。正親町の南。京極に西小在り。便^{スベテ}良房公の家なり。と。拾
芥抄に見え。けり。けり。此、事元亨釈書を始め諸書小。寛平五
年の事とせり。孰^{イハレ}う是ある事を知らざ。

天狗放言して云く。三世の諸佛に出現小非^{アラ}ずは。誰^{タレ}う我を降

さむと。爰コゝ小相應和尚ヨシ召メ小應オウじて參入サンニツし。兩三日祇候キコウまれども。其驗有ルこもれし。本山ホンサンに還カヘて。無動寺の不動明王フドウミョウに對タテマツし奉ホウ了リョウ。事由コトノヨシを啓白キハクして愁懷シュカイ祈請キシンす。そ此時明王ミョウ背ソムきて西ニに向ふ。和尚ニカガ隨ツキひて西ニ坐マじ。明王ミョウまゝ背ソムたて東ニ向ふ。和尚ニカガまゝ東ニ坐マじ。明王ミョウ忽タチ小背ソムたて南ニ向ふ。和尚ニカガはく南ニ坐マして。涙ナミダを流ナガし合掌ゴウサウ稽首キシュして云く。相應明王オウオウミョウ字イミ戴イき奉ホウ了リョウ。更イタう他念タニエンあり。而シカる小今何イマニの過アヤマを犯オカせタ。此事有アルて。かく相背オウソた給ふぞと。明王ミョウの本誓ホンチを念ネンじて眼メを合アヒはる間ホトふ。

不動明王フドウミョウ此本誓コノホンチと云。其一其一。見ミ我身ガミ者ヲ發ハツ菩提心ボツジシン。聞ク我名ガナ者ヲ斷タテマツ惑マヤカシ修シユ善ゼン聽リ我說ガクハシ者ヲ得エ大智慧ダイチ。知チ我心ガシン者ヲ即身成佛ソクシニブツトウ。其二其二。一一

持ホ祕密呪ヒミツク生ナく而モ加護カゴ奉仕ホウシ修行者シユウギヤウ猶如ユウニョ薄伽梵バクガフンと有アル了リョウ。此事コノコト谷響集コノコト小も見えミエ了リョウ了リョウ。

夢ユメ小も非ヒを覺サメる小も非ヒ也。明王ミョウ示シして云く。我生ガシユく加護カゴの本誓ホンチよありて。去サリぐと此事コノコトあり。今イマ顯アスる其本縁コノホンエンを説トクむ。昔サキは紀僧キソウ正眞セイシン濟存生セイソンのとき。我ガ明呪ミョウクを持モツす。今の汝ナニが如ニし。而シカる小邪ジャ執シツ也ヤ。天狗道テンコウダウ小墮タし。本修ホンシユの功力コウリキ小よありて。皇后クワウ被セ逼惱ハツナウまに。我ガまゝ本誓ホンチに爲ナる。彼カ天狗テンコウを護メる故ユヘに汝ナニ小背ソムく。我ガ呪クを持モツせむ。彼此ヘツ同朋トウポンあるが故ユヘに。彼カ天狗テンコウを縛ガタし難ガタし。然れども汝ナニ堅誠ケンセイある故ユヘに。我ガ已ヤムとを得エる。汝ナニに祕方ヒフ字ジ示シさむ。汝宮掖ニョウエツに至イタらは密ヒツカ小彼カ靈リョウを語カタれ。你ナニに眞濟シンセイの靈リョウ小非ヒ也ヤと。彼此ヘツを聞キ

うは。必頭を低て恥^{ハチ}澁^{シラ}ら^テ。爾時小大威徳の明呪をもて加持せむ。加^カ明^{メイ}ら^ニ交^{カウ}降^{カウ}伏^{フツ}を得む。我ま^ニ彼^カ邪心を回^{カヘ}して。正道小入^イら^ニ免^メむ^也。

宇治拾遺物語。叡山無動寺の相應和尚也。比良山の西。葛川の三瀧といふ處も。通^{カヨ}いて行^イひ^タり^タり。其瀧^ミおて不動尊小云^ミら^ニく。我^ガ負^{カヒ}て都卒^ト此内院。弥勒并の許^エは將行^{サテユキ}給^ス牙^アと強^{シナガチ}し申^{マウ}られ^タ。極^{キマ}めて難^{カタ}き事あれども。強^チう申^{マウ}おと^テ形^{カタ}れば將行^{サテユク}べし。其尻^{シリ}を洗^{アラ}へと云^イら^ニま^シば。瀧^ミ此^{コノ}尻^{シリ}おて水^{ミヅ}何^{ナニ}み。尻よく洗^{アラ}いて。明王の頭小^コ此^{コノ}ア^アて。都卒^ト天^{テン}小^コ昇^{ノボ}り^{タリ}。爰^{コノ}内院の額小^コ。妙法蓮華と書^カま^シら^ニり。明王云^イく。是へ參入^{サンニ}の者

は。此經を誦して入^イる。誦^スせざれを入^イら^ニま^シと云^イふ^ハ。遙^{ハルカ}小^コ見^ミ上^{ウヘ}りて相應云^イく。我^ガ此^{コノ}の經を讀^ヨみ。讀^ヨめ^タも誦^スま^シること未^イだ^ニ叶^{カナ}は^ニと云^イふ^ハ。明王^{メイオウ}も口^{クチ}惜^シき事あり。其義^ギれらば參^{サン}入^ニ叶^{カナ}ふ^ハら^ニま^シ。歸^{カヘ}りて法華經を誦^スしてれ^レち參^{サン}入^ニべしと^モ。搔^{カキ}負^{カヒ}て葛川へ歸^{カヘ}り^タま^シば。相應泣^{ナキ}悲^{カミ}むこと限^{カハ}あ^リ。而^{シテ}本尊の前^{マエ}めて經を誦^スしての^ノち。本意^{ホンイ}を遂^{トゲ}り^タりやれ^タむ。其不動尊今^{イマ}は無^ム動^{ドウ}寺^ジ小^コア^アて。等身^{トウシン}れ像^{ゾウ}ありと有^{アル}。釈書^{シャクショ}小^コも此像も。貞觀五年の比。相應^{オウオウ}が等身^{トウシン}の長^{ナガ}小^コ自^ミ刻^キせ^タ。依^ヨ由^ユい^ハへり。深^{フカ}殿^{テン}后^コれ御^ミ祈^{イノ}せし時^{トキ}小^コ。彼^カ方^{ホウ}此^{コノ}方^{ホウ}は向^{ムク}こ^ノる像^{ゾウ}。や^ハが^テ其^レある^ハ。太^{タイ}上^{ジョウ}記^キ釋^{シヤク}魔^マの憑^{ヨリツキ}託^{トク}ら^ニり^タむ故^ユ。然^サる異^イ驗^{ケン}れ有^{アル}し^ハれ

了。不動と云々。その陀羅尼祕密法。毘盧遮那佛之化身と云い。大威德明王と云は。阿弥陀佛の化現ある由。真言の書にも見えざるが。此二佛共。元より有名無實なれど。其像は憑物あくては。斯る異驗の有はくも非に。まゝ若くは相應が心と。かく依事の有しと。妄話せるも知らうらむ。法師の然る妄説ハ。珍有なれど。

相應和尚おれ告を得て。感涙小堪ぢ。頭面接足禮拜恭敬して。後日小召うよて復參り。明王の教誡此旨小任せて。加持し奉る間。天狗を結縛せど。今より已後まゝ來たりらむと。歸伏のめち。此は解脫しられむ。后は尋常小復し給ふと有り。

眞濟があと。清和天皇紀。貞觀二年二月二十五日の下。僧正傳燈大法師位眞濟卒。俗姓紀朝臣左京人也。父巡察彈正正六位御園。眞濟少年出家學大乘道兼通外傳。夙有識悟。從空海僧都受眞言教。師監其器量特加提誘。遂授兩部大法。爲傳法阿闍梨。時年二十五。時人奇之。眞濟入愛當護山高尾峯。不出十二年云々。天安二年八月。文德天皇寢病。眞濟侍看病。大漸之夕時論嗽。眞濟失志隱居。遷化時六十一と見え。釈書小。眞濟郷。惟喬親王と惟仁親王と。位定められ。眞濟も惟喬親王の驗者を承了。慧亮法師も。惟仁親王の驗者と成て。驗を抗るゝ勝ちて。惟仁親王儲君と成給へど。清和

天皇是あり。あつゝ眞濟大志を失ひ。まゝ文徳天皇の看病小驗れきも依て。倍々志を失ひて。隱居せる由を記し。まゝと贊曰。眞濟色も惑ひて魅と成るとは。彼不平の時小當てて。儉小皇后の美色を眼て。所守を失ひあると云ふ。然る小本朝高僧傳も。極め眞濟が魔と成協と云ふ。世に浮説ある由を辨へしれど。此後延喜十一年の頃。玄昭と云ふ依僧の亭子院にて修法のとき。眞濟が靈鵲と成て來れるを。玄昭捕へて爐に投じて焼く依も。まゝ怨を結びて。異志き小僧も化して。空より降來る。玄昭法師此を見て。心身悩乱し。依を淨藏法師が加持して。彼靈を降伏せるよしと。

淨藏が傳小見え。源平盛衰記ある。住吉を名乗れる物の言小も。柿本紀僧正大法慢を起して。大天狗と成き。是を愛宕山の太郎坊と申しと云ひ。雲景が未來記にも。愛宕山に集ひて。世を乱さむ計りる天狗れ中。太郎坊とて眞濟も何。是もて神社考ふ。柿本紀僧正入高尾峯起大慢心。為太郎坊とは記さきし成べし。然るを澄圓僧が神社考志評論。此を辨して。既明王曰。回彼邪心令入正道。若爾眞濟墮鬼趣得遁者也と云ふれども。玄昭法師が修法の處に至るは。是より遙後あるを如何せむ。不動明王が。彼邪心を回して。正道入しめむと云ふれども。其を賴がとし。然るは

其謂^{イハ}ゆる正道やうて釋魔の正道ある故^ナ。猶^{ナホ}妖魅を脱^{ヌケ}せ
ば。其^{ソノ}を此後^{コノノチ}も依然^{イッパン}として。天狗^{テング}此列^{コノツラ}小有^{コトアリ}を以て知^{シル}べし。
釋淨藏^{シヤクジヤウ}をせう。大德貴所^{ダイタクキショ}や稱^{イハ}れし^ル。近江^{オミ}介中興^{ケウチュウキウ}が娘^{ムスメ}小^コ奸^{ケン}
あて。眞弟子を生み。

今昔物語集。大和物語あどみ。近江^{オミ}介平中興^{ケウヘイチュウキウ}と云^{イハ}人^{ヒト}有^{アル}けり。
家^{イヘ}豐^{ユタカ}ふして。子^コ共^{トモ}數^{スベテ}有^{アル}る中^{ナカ}ふ。一人^{ヒト}の娘^{ムスメ}有^{アル}り。年^{トシ}いま
若^{ワカ}あて。形^{カタチ}美麗^{カミナガ}し。髮^{カミ}長^{ナガ}く。有^{アル}様^{サマ}微妙^{ミウミョウ}う^ニけられ。父母^{フボウ}此^{コノ}を悲^{カナシ}
び愛^{アイ}して。目^メを放^{ハナ}ち事^{コト}もあくて。養^{ヤシ}る程^{ほど}。兵部^{ヘイブ}卿^{ケイ}宮^{ミヤ}れど
申^{モウ}り^レ止^{トメ}事^{コト}れ^ニ御子^{ミコ}。ま^ニ上^{カミ}達^{タチ}部^ベあ^ニど。數^{スベテ}夜^ヨ這^シり^レれども。娘^{ムスメ}
高^{タカ}ふ^ニて從^{したが}ち^レば。父母^{フボウ}も天皇^{テンノウ}小^コ奉^{ホウ}らむ^ニと思^{おも}ひて。聲^{コエ}取^{トリ}を為^なす

て傳^カり^レ^キ。此^{コノ}娘^{ムスメ}物氣^{モノケ}煩^{ワザ}ひて。日^ヒ來^キ小^コ成^{ナリ}けれむ。父母^{フボウ}此^{コノ}
を歎^{ナゲ}き。旁^{カタハラ}に付^{ツキ}て。祈^{イノチ}禱^{タマハシ}共^{トモ}を為^なせり^ニ。せども。其^{ソノ}驗^{ケン}を無^ムき^ニられ
ば。思^{おも}ひ^レ繚^レける^ニ。其^{ソノ}頃^{キリ}淨藏^{ジヤウサウ}大德^{ダイタク}といふ止^{トメ}事^{コト}れ^ニき有^{アル}驗^{ケン}の僧^{ソウ}
有^{アル}。實^{ジツ}に驗^{ケン}德^{タク}新^{シン}れる^ニ。こと佛^{ブツ}の如^{ごと}く也^{なり}。れむ。世^ヨ舉^{コシ}て此^{コノ}を
貴^{タラシ}ふこと限^{カギ}あり。近江^{オミ}介^{ケイ}此^{コノ}淨藏^{ジヤウサウ}を以^{もつ}て。娘^{ムスメ}の病^{ヤミ}を加^カ持^シせさ
せむと思^{おも}ひて。構^{カマ}りて呼^{ヨビ}り^レむ。淨藏^{ジヤウサウ}行^{ユキ}り^レ。介^{ケイ}喜^{ヨロコ}びて加^カ
持^シせさせり^ニ。即^{スグ}物氣^{モノケ}顯^{アス}きて。病^{ヤミ}止^{トメ}ふ^ニけ^レ。と暫^{シラ}くは此^{コノ}て
御^ミあ^ニして。祈^{イノチ}らせ給^{たま}へと。父母^{フボウ}強^{ツヨク}う^ニ云^いり^レむ。淨藏^{ジヤウサウ}言^{コト}ふ^ニ隨^{したが}
ひて。暫^{シラ}く有^{アル}る程^{ほど}。驛^{エキ}に此^{コノ}娘^{ムスメ}を淨藏^{ジヤウサウ}見^ミてり^ニ。忽^{タチ}小^コ愛^{アイ}
欲^{ホウ}の心^{ココロ}發^はて。更^{さら}小^コ他^タ事^{コト}不^フ思^シり^レ。了^り。ま^ニ娘^{ムスメ}も其^{ソノ}氣色^{キシキ}を心

得とめりる。然て日來^{ヒゴロ}経る程ふ。何ある隙^{ヒマ}う有けむ。遂^ハ會^{アヒ}けり。其後此事隱^{カク}きと爲れど。自然^{オノツカラ}人粗^ホ知ふれむ。世^ヨを聞えり。然れを世人此事を云^{イヒ}繚^{マツ}けるを。淨藏聞て。恥て其家ゆも行^レけ成^ナりる。我^レか^レ名^ナを取^リて。今は世ゆも有らじと云て。跡^{アト}を暗^{クラ}まして失^{ウセ}り。悔^{クハレ}有ける。や。其後鞍馬山^{クラマ}や云處^{コト}。深く籠^{コモリ}居て絶^{タテ}て行^レける。前生の機縁^{アリサマ}や深^{フカ}う。常^{ツネ}小彼娘^{コカノナ}の有狀^{アリサマ}に思^{おも}ひ出^デられて。心^{ココロ}懸^カて。戀^{コヒ}しく思^{おも}ひけむ。行^レけ空^{ソラ}もあくて耳^{ミミ}有^アり。旅^リ程^{チヨ}は。打^{ウチ}臥^シふり。起^キ上^{アガ}て見^ミれば。傍^{カタハラ}小文^{フミ}有^アり。弟子^{シシ}の法師^{ホフシ}に一人^{ソノタリ}副^{ツク}有^アける。此^{コノ}を何^{ナニ}ぞの文^{フミ}ぞと問^トはれむ。知らぬ由^ユを答^{コタ}へ

けせば。淨藏文^{フミ}を取^{トル}て披^{ヒラ}き見^ミる。我^レが思^{おも}ふ人^{ヒト}の手^テうて有^アり。奇^キ異^イと思^{おも}ひて讀^{ヨミ}めむ。かく書^{カキ}さる。墨^{スミ}深^{フカ}に鞍馬山^{クラマ}といふ人^{ヒト}を。あづるくを返^{カヘ}て來^キあむ。むと有^アり。淨藏此^{コノ}を見^ミる。小^{イト}系^{ケイ}怪^{ガイ}く。此^{コノ}を誰^{タレ}をもさ遣^{オクセ}ある。わらふ。持^{モテ}來^キけき便^{タビ}もねがえ。奇^キ異^イ事^{コト}うれと思^{おも}ひて。今^{イマ}を此^{コノ}事^{コト}止^ヤめて。偏^{ヒト}小^コ行^{コウ}をせむと思^{おも}ふ。も。形^{カタ}不^フ愛^{アイ}欲^{ヨク}の思^{おも}ひ小^コ勝^{カチ}びして。其^{ソノ}夜^ヨ忍^シびて京^{キョウ}に出^デて。彼^{カノ}女^メの家^{イヘ}小^コ行^{コウ}て。構^{カマ}へて然^{シカ}くと云^{イハ}入^レる。りれむ。娘^{シラカ}竊^{ヒソカ}小^コ呼^{ヨミ}入^レて會^{アヒ}ふ。然^サてま^マ夜^ヨに内^{ウチ}。鞍馬山^{クラマ}返^ヘて行^レけ。其^{ソノ}うれを戀^{コヒ}くて。女^メ許^カ小^コ此^{コノ}を忍^シびて云^{イハ}遣^{ヤリ}る。辛^{カラ}くあて思^{おも}ひ忘^{ワス}れ。戀^{コヒ}しを。うめて啼^{ナキ}ける。鶯^{ウグハス}の聲^{コエ}と。其^{ソノ}返^ヘ事^{コト}

小女。而も君忘せけり。鶯の啼をよめみや思出べき。
とれむ有られむ。佛々淨藏大とく。我ふえよおらき人をは
置あぐら。何の罪ある世をば恨む。とも云い遣りて。此様
よ云い通ちと。度くり成りれむ。此事皆世に聞えりけり。
然るは此娘をば。近江介限なく傳ちて。女御に奉らむと思
けれども。此く聞えふられむ。親も知らずして。遂に見え成
りて。此を女の心は極えて慥きなり。淨藏心は盡して云
とも。女用ざらむ。は叶はうらぬ。然るは心くら女の身を。
徒に成る也とぞ。世人云い繚らると見え。佛々發心集ふ。
彼淨藏を。日本第三の行人あれども。近江守永世が女に契

を結べり。久米仙人を通り得て。空を飛りきりれど。下衆
女は物洗ひり。脛の白かきける。小欲を發して。仙を退し
て。只人とあふけり。今世も。手足は皮を剥ぎ。指は燈し
爪を碎き。様々れ。片輪をちりて。佛道を行ふ人。其發心は
程ある。隠無れど。妻子を設くる例多かりとも有る。淨藏を。
三善清行第八の子ありて。元亨釈書に。母夢天人入臥内。而娠
生。聰明無雙。七歳求出家と有て。いと弱より。不測に法驗有
て。延喜の御世に頃。活佛の如く稱れり。小此の如し。今
昔物語に。此を女の心は極えて慥き由云ふと。女は心を
誘いて後より。男より深られ。何ふ思へども。大方は言

出づては思ひ惑ふを。男こそ。然しも深くは思てぬ物くら。
假令^{カリシ}れ如くも誘ひ試るぞ常ある。然れを淨藏こそ慙^{ニク}れ。
さふを常ふ讀む法華經ゆも。女^メ盡^{ツク}勿^レ親^シ近^ニといひ。まゝ為^ス法^{ホウ}。
猶不^レ親^シ厚^ク。況復餘事とも有^ルをや。凡て此物語に限らば。當時^{ツノカミ}
の習^{ナラ}ひとて。何の書ふも。僧の行狀をば。悪^{アク}事^ジ成^スも。悪^{アク}うら
ぬ様論^イる事いと多^タかり。心ちて見^ミべきあり。然を有れど。
此も元より人子^コなる。魔縁^{マエン}ふ引れて。幼^{コナキ}より親^シ子^コと成^ス
と。取^{トリ}外^ハして人^ニ道^{ミチ}の戀路^{コイヂ}迷^{マヨ}りむを。宜^{ヨシ}なる事あり。かく
思^シふは。極^{キョク}えて慙^{ニク}しとも思^シて交^カれず。此は此人^{コノヒト}にみ^ミゆら^ラ交^カ。
女^メの心を惑はしむ僧は。交^カれて然^{シカ}ふこそ。謾^{ミカ}ふ釈^{シヤク}氏の法

れみ執^トりて議^ギまべから^ラ交^カ。有^ア驗^{ゲン}の名高^{ナガ}僧^{ソウ}も。色^{シキ}の本心を
乱^{ミダ}せよといふども。本^{ホン}心^{シン}城^{シロ}露^{アラハ}せよとよそ云^{イハ}ふれ。斯^{コノ}大^{ダイ}
和物語。後撰集あやふ。此女親^{オヤ}れなく^ラ交^カて後^{ノチ}ふ。男と共^ニふ
他國^{ホクニ}ふ。はう^ハなく^ラて住^{スミ}るを哀^{アレ}が^ラ交^カて。平兼盛^{ヘイケンセイ}を^ヲち^チこれ
人目^{ヒトメ}まれ^レある山^{ヤマ}ざと^ト。家^{イヘ}居^イせむとは思^シひきや君^{キミ}と詠^{ユミ}て
遣^{ヤリ}る^ヲ。返^ヘ事^ジもせ^セで。よ^ヨそ泣^{ナキ}る^ヲも有^アて。發^{ハツ}心^{シン}集^{シツ}ふ。近^{キン}
江^エ守^シ永^{エイ}世^{セイ}の女^メと^ト所^{トコロ}依^ヨる。今昔物語。大和物語あ^ハと^ト。近江^{キンケイ}介^{ケイ}
中興^{チュウキョウ}が娘^{ムスメ}もあるを。誤^{アヤ}れる^ヲあ^ハ依^ヨべし。

釋^{シヤク}道^{ダウ}命^{メイ}は。阿闍梨^{アセリ}と^ト志^シて。誦^{ソウ}經^{キョウ}第^{ダイ}一^{イチ}と^ト世^セに稱^{ショウ}せられ。其^{ソノ}驗^{ゲン}炳^{ヘイ}然^ニ
き人^{ヒト}なる^ヲ。和泉^{ワヅ}式^{シキ}部^フふ深^{フカ}く睦^{ムツ}ひ。

道命阿闍梨も傳大納言道綱の子にて。天台座主慈惠大僧
正に弟子あり。幼より山に登りて法花經を受持す。初めは
一年ふ一卷を誦して。八年より一部を誦し畢。音微妙なり
て曲を加ふ。音韻を致さばと云ふも。聞人耳を傾りて。
讚歎せむと云ふと無きや。然れど色に耽る僧なり。和
泉式部小通り也。宇治拾遺物語。古事談。東齋隨筆れど。道
命或時式部がゆ行て臥し居る小。目覺て經を心を澄し
て讀る小。八卷讀む。曉に眠まむと爲る程。人の氣
はひの爲けれむ。彼は誰ぞと問はれむ。已は五條西洞院に
邊小を床翁ありと答はれむ。道命おは何事侍ると云へ

は。今宵此御經を承給はせぬる事。生て世に忘がく侍る
也云はれむ。道命法花經を讀ことは常此事あり。れど今宵
しも言ふぞと云へむ。五條に齋云く。清くて讀參らせ給
ふ時。梵天帝釈を始め。聽聞し給へば。翁れども近く參り
て承給たる事能はむ。今宵は御行水も候はで。讀奉らせ給
ふは。梵天帝釈も御聽聞候てぬ隙。翁參りて寄りて承給
せし候ひぬる事。忘がく候也と云ひぬ。有る。はる古
今著聞集小。道命阿闍梨と。和泉式部也。一車ひてまねく行
り。道命後むきて居るを。和泉式部。などかくは
居あるぞと云はれむ。よしやよし昔やむろしいがごとの。

あみも合れむれちえおそはしとも有り。此て五條の齋と
は。謂ゆ五條の道祖神あり。此を眞の塞神ミトサウカミは。何うで。後
世マキに祭れる。漢土に鬼イヤミに依モリ故に。佛法を貴タトべる。妄語を
を放はなりるあり。斯る事ありや言出けむ。今昔物語集に。此僧
法輪寺に禮堂コモありて。經を讀み依モリ。一老僧も共トモに籠コモリ
る。其夢に。金峯山の藏王。熊野權現。住吉神。松尾神。あど寄
りて。道命が讀經を聞給ふと見くる由を記し。法花驗記に
は。殊に妄説コトを加へて。住吉明神向マカ松尾明神言。聞キ此經時。離
生ナ業苦善根增長。仍ナ毎夜所參也。松尾明神言。我有ハ近所不
論セ晝夜常來聽經。如是稱讚シタマフ礼拜阿闍梨アサカシあといへり。驗記に。

今昔物語を取て記せる記シあり。本書に見ざる妄語を加へ
るあり。此をモて法師の記せる書シを。殊に妄説多き事
を知べし。れに今昔物語に。或女メに託ツキに依モリ靈。道命が讀經を
聞て。惡道ニムカを免れて。天上に生ナる由を云ふ事あり。其を佛
法を信ずる。愚人の靈に常あれむ。怪む。足らぬ。此て此法
師の死後。或人ニに夢に。大なる池の中。經を誦ノボする聲コエを
る。我ユラキ聞キむ。道命が音あり。池中我見る。彼阿闍梨アサカシ船フネに
乘て來て云く。我生イキする時。禁戒タモを持タ。天王寺別當の
時。佛物を用ヒに依モリ罪に依モリて。此池に住ス。兩三年を逕ヘむ。罪
苦を畢ヲヘて。都卒天に生ウケべしと云ふりと有るは。僧の靈に

常言れまむ。怪む小足らふ。然れど天上の果は覺束れし。
釋朝勸を。志賀寺に上人を聞えし。京極御息所。小想を懸
て。ゆらむ玉緒の古歌を詠じ。

寶物集ふ。京極御息所と申は。左大臣時平公の御女あり。
延喜れ女御に參り給ふ夜。寛平法皇に。出立見むとて。御幸
して見給はる。御心は著給はれば。老法師に給はせぬと
て。押取給へ。旅人の御事あり。此御息所志賀寺へ詣で給け
旅を。寺に聖人見奉り。次日彼御息所の御許に參り。對面し
給へり。るを悦びて。御手をとめて詠侍り。初春に初
子の今日に玉箒。手小執らる。ゆらむ玉の緒と詠えて。今

生れ行業を譲り奉。旅と云へり。と見え。盛衰記。京極御息
所。志賀寺詣のと記。彼寺に上人心を懸奉り。今生の行業を
譲り奉らむと申せば。よし。ゆらは眞の道に志する。して。我
をいざれ。子ゆらむ玉の緒。と打詠め給ひて。御手を授け給
ひ。り。と有。上人に詠する歌を。万葉集。中納言家持卿
の。正月初子に日。玉箒を賜はせり。時。讀出らむ。古
歌ある。我詠え出あるあり。宇治大納言物語。寛平御門出
家して。忌。う。行をせ給はれむ。天狗のけき參らせて。京極
に御息所。小れとし。參らせけると。記。

釋善祐。粟田口僧正と聞えし。旅。二條后。小密通し。

王代一覽小。寛平八年小。二條后高子。五十六才にて。東光寺
に善祐と密通有し故^{キヤキ}。后は位を奪^ハた^レ。善祐も伊豆國小
流^{ナガ}さるや有^レ。拾遺集小。善祐法師流されたる時。母の云遣^{イミダ}
し^ハ^ハ^ハ。涙^{ナミ}世はみ^ナ海と成^{ナリ}あ^ハむ。同じれ^ナぎ^ナら^ハ流^ナれ
よるべく。井澤長秀云。伊豆國熱海小。紀僧正が墓^{ハカ}あら^ハび^ハ。
僧正が植^{ウヰ}し都松^{ミヨコマツ}とて有^リ。土俗云く。紀僧正^{キソウジョウ}の^ハ手^テね^ハら^ハ植^{ウヰ}
し松あり。都を^{ミヨコ}あ^ハい^ハ歎^{ナガ}く故^ハ。此松も枝^{エダ}悉^{コトク}く都^{ミヨコ}に向^{ムク}ふ故^ハ。
小。都松といふ。又を染殿松とも云^ハい^ハへ^ハ。按^{オモ}ふ^ハ善祐法
師^シが墓^{ハカ}を。紀僧正と誤^{アヤ}り傳^{デン}へ^ハある^ハなり^ハ。